

# PhantasyStarOnline2— IF—「A.B.T」

あるふい@ship10

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

己が力を示す為、アークスは戦う。

たとえそれが、戦場で背を預ける仲間だとしても――

# 目次

第1話「A・B・T開催」	1
第2話「A・B・T予選」	13
第3話「A・B・T最終ブロック」	24
第4話「黒き死神 v s 黒の巫女」	31
第5話「ナウシズの双星」	43
第6話「英雄2人」	55
第7話「白き戦姫 v s 白の巫女」	68
第7.5話「休憩時間」	82
第8話「黒き死神 v s 双星の一」	

第9話「ウル v s ナウシズ」	90
第10話「死神 v s 戦姫」	



# 第1話「A・B・T開催」

—新光歴242年3月31日

アークス総動員による決死の戦いによって、終の女神シバもとい【深遠なる闇】は消滅した。

【深遠なる闇】の消滅によって、これ以上ダーカーが増えることは無くなったが、既に産み落とされたダーカーは未だに各惑星に身を潜めている。

残存するダーカーの殲滅、そしていつしか訪れるかもしれない危機に対し、万全な状態を維持するため、10番艦“ナウシズ”の守護輝士、あるふいは一つの提案をした。

それが、アークス同士による戦技大会、「ARKS Battle Tournament」通称「A・B・T」である。

強大な敵がない現状、日に日に衰えていく戦闘能力を維持するため、アークス同士による模擬戦を行い、選手同士で研鑽しあうことが目的だ。

優勝者には、多額のメセタと合わせて、“最強”の称号が与えられる。

賞金を求めて戦うもの、その名を求めて戦うもの、ただひたすらに己の実力を試すもの。

思惑は様々だが、急遽開催されたにも関わらず、参加するアークスの数は7月に開かれた第1回の時点で当初の予想を遥かに上回った。

これを見てA. B. T運営は、1年に1度の予定であった大会の開催期間を、半年に1度で行う方針とした。

そして今日、243年1月17日―

『アークス達による技と技のぶつかり合い。己の力を示し、頂点へと昇り詰めるのは誰か！第2回アークスバトルトーナメント、ナウシズブロックの開幕だああああ！！！！』

司会の言葉に呼応、観客の大歓声が響き渡る。

シヨップエリアの隅から巨大モニター越しに、大盛り上がりのお場の様子を見る女性が1人。

「ここにいたのねあるふい。」

あるふいと呼ばれた女性は、声のした方を振り向かず話す。

「まリスか。随分と早い帰還だな。帰るのは開会式後だと思っていたが。」

まリスと呼ばれた少女は、あるふいの横へと並ぶと、口を開く。

「ダーカーの数が想定よりも少なかったから、早めに帰ってこれたのよ。」

「なるほど、なら丁度いい。今から各ブロックの出場者と組み分けの発表だ。今回のトーナメントは盛り上がるぞ。」

「と言つても目立つのつて、あたしとあるふいにクオン、リランぐらいじゃないの?」  
「まあ見れば分かる。」

他にもいると言わんばかりに、あるふいは顔をニヤつかせる。

なんのことやら分からないまりスは、あるふいのニヤついた顔を見て薄気味悪さを感じながらも、再び巨大モニターの方を見る。

『—さあそれでは気になるトーナメント表の発表だ!今回は第1回に比べて強力なアークスが盛りだくさん!今回の組み分けは…これだあ!!!』

「……………うつそお……………」

モニターに映るトーナメント表を見て、まりスは唾然とする。

—シップ代表を決めるトーナメントは2日間行われる。

1日目の予選はAブロックからHブロックの計8ブロックに分かれており、それぞれのブロックで勝ち抜いた8名が、2日目の最終ブロックへと上がる。

最終ブロックでは、勝ち残った8名で再びトーナメント方式で試合を行う。

そして決勝で勝利した者がそのシップの代表となり、後日、各シップの代表が集まり、その回の最強のアークスが決まるのだ。

「ナウシズの主力勢揃いじゃない。それに……」

「今回は前回と違って皆の都合を合わせたからな。更には豪華なゲスト付きだ。まあ、8割方姉の要望だがな。」

あるふいの言葉通り、今回のトーナメント表には、ナウシズでも名だたるアークスが多く参戦していた。

第1回ナウシズ代表のあるふい。

前回に続き今回も参戦となるクオン、リラン。

前は長期の任務と被ってしまい、不参加となっていたまりス、蟬時雨。

ハルコタンの巫女、アリスとアリシア。

そして……元守護輝士であり、第1回A・B・Tでウル代表となったユウ。

観客は彼らの名前を見た瞬間、一瞬ざわつきがあったが、すぐに大歓声へと変わった。名だたるアークス達の対決をこの目で見る事ができる。

観客の全員が、これから始まるであろう激戦に心を躍らせていた。

「順当に行けば、全員最終ブロックでぶつかりそうね。」

まりスの言う通り、有力なアークス達はそれぞれが各ブロックにばらけていた。

「そうだな。今回も最後まで、良い戦いができそうだ。」

2人が話していると、トーナメント表の発表が終わり、次のプログラムへと移行して

いた。

「さてと、対戦相手が分かったことだし、私は部屋に戻るぞ。」

あるふいはサツとモニターから目を離し、部屋へ戻ろうと振り返る。

「ああそうだ..」

思い出したかのように口を開くと、あるふいはそのままの状態で話を続ける。

「油断して途中で敗退、なんて興の冷めるようなことはしないでくれよ?」

あるふいの挑発的な言葉に、マリスは笑みを見せながら言葉を返す。

「あたしを誰だと思ってるの? あるふいこそ、いつもみたいに慢心して隙を突かれないことね。」

その返事を聞き、あるふいは楽しそうに一笑いし、再び自室へと歩みを進めた。

「それじゃあ、決勝で」

——惑星ハルコタン・灰の領域

「どこまでいけるかなあ…。」

端末モニターに映るトーナメント表を見ながら、アリシアが呟く。

「お互い最終ブロックまでいければ十分じゃない？」

アリシアの呟きに対し、アリスが冷静に答える。

「そうだよね… きつと最終ブロックの相手はまりスさんになるだろうし…。」

「こつちもこつちで相手はあるちゃんだろうから… 特殊なルールとはいえ、勝てるビジョンが思い浮かばないや。」

アリスはお手上げといったように両手を上げる。

すると、2人の背後に小さな灰のつむじ風が巻き起こり、その中心から1人の女性が姿を見せる。

「かかっ。なんじゃなんじゃ、アリスもアリシアも、戦う前から空気が重いのを。」

「ヒメ様!!」

ヒメ様と呼ばれたその女性は、灰の神子スクナヒメその人であった。

スクナヒメはそこに漂う重い空気を壊すかのように、大層に笑う。

「まだ戦つてもおらぬのにそんな弱気では、勝てるやもしれぬ戦いも勝てなくなるぞ、2人とも。」

「そうは言われても……これまでの実力を見てると勝てる見込みが全く無くて……何か弱点があればいいんですけどね……」

アリスアの言葉に同調し、アリスもうんうんと頷く。

その言葉を聞いたスクナヒメは、少し悩むと、開いていた扇をパンつと畳み、笑みを見せる。

「ふむ……弱点を突くのは難しいが……あの2人と渡り合えるだけの力は、おぬしらの身にしかと宿っておるぞ?」

「え……」

——フランカ、sカフェ

カフェの入口近くの広いテーブルで、セラフイム、蟬時雨、クオン、リランは集まって食事をしていた。

「今回の出場者は豪華ですね…。」

セラフイムは端末のモニターに映る選手表を見ながら啞然とする。

自身が知る強力なアークス達が揃いも揃ってずらりと並んでいるのだから無理もない。

その様子を見て、蟬時雨が声をかける。

「あなたは出場しないのですか？前回最終ブロックまで勝ち残ってましたよね。」

「あれはあるふいさんからお試しでと言われたので参加しただけで…。そもそもボクはサポートとしての立ち回りがメインなので、1対1の勝負は苦手なんですよね。チーム戦とかあれば参加したいですけど…。」

「チーム戦ですか…。面白そうですね。今度あるふいに提案してみますか。」

セラフイムと蟬時雨がそんな話をしていると、一通り食事を終えたのか、クオンが勢

いよく席から立ち上がる。

「どうしたんですかクオン。急に立ち上がった。」

「特訓!!」

蟬時雨の問いに対しクオンは元気に答えると、勢い良くゲートエリアへと駆けていった。

「いったいどこに…」

「おおかた、VR空間でしょうね。あそこには特訓に最適なトレーニングダミーがいますから。」

フォトナーとの終戦後、各艦にはそれぞれの艦に所属する守護輝士の戦闘データを元にしたトレーニングダミーが登録されている。

腕試しと称して守護輝士のトレーニングダミーに挑むアークスは多く、打ち倒した者には報酬も用意されているため、中々の盛り上がりを見せている。

少し遅れて、同じく食事を済ませたリランは静かに立ち上がった。

「私も行ってくる。」

そう言うとりランも、足早にゲートエリアへと向かっていった。

「2人とも行っちゃいましたね…」

「トーナメントに向けてやる気があるのは非常にいい事ですが…そのままにした食器

を片付ける人の事も考えて欲しいものですね。どうやらあとで、お説教が必要なようです。」

「あ、いやいいですよ。ボクが片付けておくので、お気になさらず。」

蝉時雨の”お説教”という言葉にヒヤツとしたのか、セラフィムは慌ててその場をなんとかしようとする。

「あら、いいのですか？では、よろしくお願いしますね。」

声のトーンが優しくなったのを感じ、セラフィムはホツと心を落ち着かせた。

「蝉さんは特訓とかしないんですか？」

クオンとリランが頼んだ食器をまとめながら、セラフィムは蝉時雨に問いかける。

「あるふい達の戦いは日々この目で見て大体理解しているので、そこまで問題はありませんか。ただ一つ懸念があるとすれば――」

蝉時雨は残った少量の紅茶を飲み干してから言葉を続ける。

「ナウシズにはユウのトレーニングダミーはありません。」

「じゃあユウさんが対戦相手になったら……」

「あるふいやまりス風に言うなら、”ぶつつけ本番”ということですね。私に出来ることは、当日いつでも全力を出せるよう、しっかりとコンディションを整えておくことぐらいです。」

”ぶつつけ本番”

何事も用意周到に事に取り掛かる普段の蝉時雨からは、聞くことの無い言葉だった。

「では、すみませんが、2人の分の食器はよろしくお願いしますね。」

「任せてください。トーナメント、頑張ってくださいね。」

蝉時雨は優しい笑みを見せ、”ありがとう”と一言礼を言うと、自分の分の食器を

キッチンに返し、その場をあとにした。

(皆すごいなあ…。ボクなんか予選ブロックを勝ち抜くので必死だったのに、皆は既に

最終ブロックの対戦相手のことを考えてる。)

セラフイムは空の食器をまとめながら、一緒に食事をしていた3人を思い返す。

(もしかしたら本当にチーム戦もあるかもしれないし、それ以外でもサポート役として

しっかり立ち回れるよう、ボクも特訓しておかないと…。！)

近づく闘争に静かに心を躍らせる者。

来る試合に向けて英気を養う者。

目標を見据え対策を練る者。

ぶつかるであろう強敵に向け、己の力を高める者。

周りに感化され、より強くなろうと決意する者。  
様々な熱意が飛び交う中、最強を決める戦いは、  
まもなく始まろうとしていた。

## 第2話「A・B・T予選」

— A・B・T開催の宣言から2日後

『あれから2日が経ちー！とうとうこの日がやってきた！！最強を目指すナウシズのアークスたちよ！富と名声を手にする準備はできたか！？第2回A・B・Tナウシズ予選ブロックの開始だああああ！！！！』

司会の開催宣言に対し、観客の大歓声が応える。

『良い熱気だ！！どうやら皆、この日を心待ちにしていたようだ！！この勢いのまま試合を始めていきたいところだが… まずは改めて、ルールの確認としよう！！』

司会の言葉が終わると同時に、VR空間のメインモニターにA・B・Tの大会ルールが表示される。

A・B・T

ルール

① 出場者は全員、参加登録時に申請したクラスが装備可能なイデアルシリーズが大会

中のみそれぞれ貸し出され、原則としてその武器のみの使用となる。

② 個々の持つ特殊な能力については使用禁止。

③ 制限時間以内に、下記のいずれかの勝利条件を先に満たした者の勝利となる。

- ・ 対戦相手の武器を場外へ弾き飛ばし無力化する。
- ・ 対戦相手を場外へ落とす。
- ・ 対戦相手を戦闘不能（HPバー0）にさせる。

※VR空間を利用した特別なフィールドと武器のため、実際に負傷することはない。受けた分のダメージはデータとして処理され、モニターに映る選手ステータスのHPバーがその分だけ減っていく。

なおHPバーが減るほど、その選手に対し身体的負荷（身体が重くなったり本当に傷を負ったかのような感覚）がかかるため、実際にダメージを受けたような感覚になる。

『以上が大会のルールだ！また予選ブロックは各ブロック同時並行で試合が行われている！ロビーやショップエリアにあるモニターでは、ランダムに試合の様子が映し出されるが、個人で気になる試合がある場合はそれぞれの持つ端末で見ることが可能だ！会

場に来てくれている者は生で戦いを見ることも出来る！気になる試合を実際に足を運んで見るもよし！生で見ながら別の試合を端末で見るともよし！自由に観戦してくれ！！』

司会は一息ついたあと、再び口を開く。

『…さて、それでは始めよう！！最終ブロックへと勝ち上がるのははたして誰なのか…第2回アークスバトルトーナメントナウシズ戦予選ブロック…スタートだあああああ！！！！』

アークス同士による互いの実力がぶつかり合う戦いが、観客の大歓声と共についには始まった。

\*\*\*\*\*

出場選手には、それぞれ専用の個室が設けられ、皆、次の試合に向けて準備を整えている。

あるふいもまた、もうすぐ始まる試合に備え精神を研ぎ澄ましていた。

「……………よし、行くか。」

静かに椅子から立ち上がり部屋を出る。

選手専用通路では出番が近いアークスが何人か出入りしている。

通路を抜けた先にある広い選手控え室では、何人かのアークスが集まって会話をしたり、モニターで観戦したりしている。

フィールドへ向かい際にちらりとモニターを見ると、既に準備の出来たブロックから試合が始まっているようだった。

控え室を抜け、各ブロックの選手入場口へと進む。

既に観客の熱気は十分で、入場口を出ずとも、いまかいまかこの後始まる試合に期待で胸を膨らませているのが伝わってきた。

「まだ始まったばかりだといふのに……かなりの盛り上がりだな。」

『これより、Aブロック第3試合を始めます。出場者のアークスは、入場してください。』  
機械的なアナウンスが流れる。

「さて、予選で一番の強敵だ。少しは気合いを入れないな。」

軽いストレッチをし一呼吸すると、あるふいはフィールドへと歩みを進める。

フィールドに出るとすぐに、大きな歓声があるふいと反対側から入場してくる選手を迎えた。

初期配置に着くと、対戦相手の女性があるふいへ声をかける。

「まさか、1戦目からあなたと戦うなんてね。」

「私も、初戦の相手がお前になるとは思わなかったよ。今回は、あまり悠長にはいられないな。」

「そうよ、油断してるとあつという間に終わっちゃうわよ?」

『Aブロック第3試合、モミジ選手vsあるふい選手。スタート。』

機械音声と共に、ビーツ!!という大きなブザー音が鳴り響く。

「さあ行くわよ!!」

試合開始の音とほぼ同時に、モミジはあるふいの頭上にタリスを素早く投げる。

直後、投げた先へワープをし、武器をソードへ切り替えてあるふいの頭上から振り下ろす。

それに対しあるふいは身動きひとつしなかった。

「っ!!」

モミジは背後にいつの間にか配置されていたビットに気づく。

見ると開始時にロッドを構えていたはずのあるふいが、いつの間にかライフフルに切り替えていた。

ビットから撃ち出された弾に対し、振り下ろす動きから無理矢理身体をひねり、何とかソードで防ぐ。

直後、あらかじめ試合開始時の位置に置いていたタリスへとワープした。

「まあ、さすがにそう簡単にはいかないわよね。」

「当たり前だ。長い付き合いだからな。何をしてくるか大方の予想は付く。」

「はあ……これだからお互いに手の内を理解している相手はやりにくいのよ……ね!!」

モミジは武器をツインマシンガンに切り替え、地面を乱れ撃ち、フォトンによる煙幕を発生させる。

煙幕があるふいと共に、フィールドのほとんどを包み込む。

タリスで再び上空へとワープしたモミジは、氷と光属性のテクニックを織り交ぜた氷光の槍を大量に生成する。

それは雹のように降り注ぎ、地面へと刺さった光の槍は、氷纏によってしばらく形が残った。

さらにモミジは、炎属性のテクニックをまばらに放つ。

至る所で炎テクニックによる小さな爆発が起きると同時に、熱によって溶けた氷光の槍が、さらに濃い煙幕を作り出した。

続けざまにモミジは雷属性のテクニックを放つ。

小爆発によって散った火の粉が、雷属性のテクニックによって激しい爆発を起こす。度重なる爆発が収まり、煙幕も徐々に晴れたのを確認したモミジは、地上へと戻る。

「これならどうかしら?」

一息付きながら、あるふいのいた場所を確認する。

だがそこには、カタナを持ち、さきほどと変わらずその場に立ち続けるあるふいの姿があった。

「ふう…並のアークスなら、今ので決まっていたぞ。」

「これでも無傷って…規格外にもほどがあるわよほんと。」

「無傷というわけでもないさ。」

あるふいはモニターに映る自分のHPバーを指す。

あるふいのHPバーは確かに、僅かに減っていた。

「あれでこれしか減ってないのは実質無傷みたいなもんでしょ!」

「ははっ、まあそれもそうだな。さてと…」

あるふいは軽く笑いながらも、武器をライフルへと切り替える。

「負けず嫌いなお前の事だ、まだ続けるんだろう?」

「…当たり前よ。あなたの言う通り、私は諦めが悪いからね…!!」

モミジはそう言うと同時に足を強く踏み込み、あるふいへと向かっていく。

それを迎え撃つようにあるふいは無数のビットを展開させモミジを攻撃していく。

ビットから放たれる弾幕を躲し、受け流し、前へと進む。

なんとか進み続け、至近距離へと近づいたモミジは持っていたソードを力強く振り上げる。

あるふいはカタナへと切り替え、素早く振り下ろす。

両者の刃が激しくぶつかり、ガキンツ!!という激しい音が鳴り響く。

しばらく鏢迫り合う2人だったが、頭上に出現した複数のビットを確認したモミジはその場から素早く離れ、ビットから放たれた弾をツインマシンガンで相殺する。

直後、モミジの背後にあるふいが現れ、カタナを横薙ぎに払う。

モミジはなんとかソードで防ぐが、不意の攻撃に受ける準備が万全ではなく、少し弾き飛ばされると同時に体勢が崩れる。

その隙を見逃さず、あるふいは瞬く間に距離を詰め、カタナで連撃を叩き込む。

怒涛の連撃をモミジは必死に受け流し続けるが、反撃の隙が全くない。

あるふいからなんとか距離を取ろうとモミジは連撃の合間を狙って離れた場所にタリスを投げる。

急ぎワープを行い距離を取る事に成功するが、あるふいは追撃をせず、ただ一言だけ言った。

「その辺り、足元に気をつけた方がいいぞ。」

「っ!?!」

いつの間にかモミジの周囲には、いくつもの地雷式ビットが散らばっていた。

直後、それらを防ぐ態勢を整える暇もなく、周囲のビットが次々と爆発を起こす。爆発によって辺りが煙に包まれる。

「くっ…。」

—まともにくらった。

その様子を目の当たりにしていた観客も、モミジ自身もそう確信していた。

だがモミジは、自身の身体がまだ問題なく動くことに気付いた。

「これって…!!」

「そう、ただのダミーだよ。」

あるふいは、構えていたライフルから銃弾を1発撃つ。

それはモミジの持つ武器へと当たり、予想外の出来事に油断し手を緩ませてしまっていた為、武器を容易く弾き飛ばされてしまった。

弾かれたそれは宙を舞い、フィールド外へと落下する。

直後、試合開始時にも聞いたブザー音が鳴り響く。

『ビーツ!!モミジ選手の無力化を確認。勝者、あるふい選手となります。』

観客の歓声がフィールドを包み込む。

結果はあるふいの圧勝ではあったが、そのあるふいに果敢に挑んだモミジにも、観客

から盛大な拍手が送られた。

「はあ…… 最初から最後までダメだったわね。完全に手玉に取られてたわ。」

「ルール上、個々の能力の使用ができないからな。お前の能力は強力すぎた分、それに頼りつきりな戦闘スタイルだったのが敗因だろう。」

「ぐうの音も出ないわ……。今度ファレグさんにでも修行させてもらおうかしら……」

「いや……。ファレグだけはやめておけ。」

「あら、どうして?」

即答するあるふいに対し、モミジは疑問を抱く。

「……………とにかくやめておけ……………」

過去に何かあったのか、あるふいは軽いトラウマでも思い出したかのように頭を抑えていた。

「…… ふーん……。なんとなく察したわ。それはそれとして、今後の予選ブロックの手はあなたなら問題ないだろうから心配することもないだろうし、帰ってゆっくり休ませてもらうわ。明日の最終ブロック、観客席から見てるわよ。」

モミジはあるふいに背を向け、入退場口のテレパイプへと向かいながら手を振る。

「あ、そっかいえば——」

転送する直前で、モミジは思い出したかのように振り返る。

「もし負けたら、私の”あるふいに着せたい服リスト”の中から1着来てもらおうから♪」  
「っ!!おい待て!!」

あるふいの静止の声が届くよりも先に、モミジはテレパイプを通じて帰ってしまっ  
た。

「はあ…： 戦い以外となるといつもこれだ…：」

試合には勝ったというのに、なんだかやるせない気持ちになったあるふいは、ガクツ  
と肩を落としながら退場していった…：

\*\*\*\*\*

その後も、各試合は順当に進んでいった。

予選にも関わらずこの試合会場も席を埋め尽くすほどの勢いで、明日に待つ最終ブ  
ロックにもかなりの期待が寄せられていた。

そして全ての予選ブロックが滞りなく行われ、早くも戦いは明日の最終ブロックへと  
続く…：

## 第3話「A. B. T最終ブロック」

—A. B. T 2日目

フィールド上に、予選ブロックを勝ち残った8人のアークスが立ち並ぶ。

『さあ！昨日より始まった第2回A. B. Tナウシズ戦だが、無事問題なく、最終ブロックの選手が全て決まったぞ！！』では改めて、予選を勝ち抜いた屈強なアークス達を紹介していこう！！』

直後、モニターが切り替わり、フィールドに立つアークスそれぞれに対し、司会の紹介と共に一人一人順番に映し出していく。

『Aブロックを勝ち抜いたのはやはりこのアークス！ナウシズの守護輝士でありこのトーナメントの発案者、あるふい！！初戦は付き合いの長いモミジと激しい攻防を繰り広げたが、持ち前の読みの鋭さから常に優位に立ち回り快勝！その後もさすが守護輝士といった実力でいとも容易くここまで勝ち上がってきた！！』

『Bブロックを勝ち抜いたのはハルコタンの黒の巫女、アリス！さすがはハルコタンの神子スクナヒメに仕える者といった実力でここまで勝ち上がってきた！その力は強豪ひしめくこの最終ブロックでも通用するのか！！』

『Cブロックを勝ち抜いたのは、ナウシズの双星』の1人、リラン！前回の第1回A・B・Tでは準決勝で惜しくもあるふいに敗れてしまったが、今回は大きく立ちはだかるもう1人の双星を打ち倒し、リベンジに望めるのか!!』

『Dブロックを勝ち抜いたのはリランと同じく、ナウシズの双星』と称されるクオン！第1回A・B・Tでは決勝まで勝ち上がり、あるふいと激戦を繰り広げた猛者だ！前回惜しくも手が届かなかったナウシズ代表の名を今度こそ掴み取り、最強への挑戦権を手にすることができるとか!!』

『Eブロックを勝ち抜いたのは第1回A・B・Tウル代表、ユウ!!今回はナウシズに所属中ということもあり特別こちら側での参戦だ！そして前回ウルの猛者を制しウル代表となったアークスといった腕前で、このナウシズ戦においても最終ブロックまで順調にコマを進めてきたぞ!!』

『Fブロックを勝ち抜いたのは蝉時雨！守護輝士であるまりスの縁者でもあり、アークスとして入りたての頃の彼女を育て上げた立役者だ!!予選ブロックではまりスの弟であるいリスに勝利！守護輝士に並ぶ者と称されるその実力はいかに!!』

『Gブロックを勝ち抜いたのはナウシズのもう1人の守護輝士、まりス！あるふいの妹であるみにふいを制し、最終ブロックへと勝ち進んだ!!この最終ブロックでも守護輝士としての威厳と実力を見せるのか!!』

『Hブロックを勝ち抜いたのはハルコタンの白の巫女アリシア！黒の巫女アリスと共にスクナヒメに任せ、星を守護する実力者だ！予選では体力温存の為か少々危なっかしい部分もあつたようだが、この最終ブロックではどこまで力を発揮できるのか!!』

『以上の8名が今日！ナウシズ代表の座を巡り勝負することとなる!!果たして最強への挑戦権は誰のものになるのか：：再びあるふいが手にするのか！もう1人の守護輝士、まりスのものになるのか！前回のリベンジに燃えるクオン、リランのどちらかを取るのか！ハルコタンの巫女、アリスかアリシアのどちらかの手に渡するのか！今回のダークホース、蟬時雨かユウのものになるのか！みなこれから始まる激戦を、最後までしかと見届けてくれ!!』

観客の大歓声がフィールド内に響き渡る。

「この盛り上がりよう：：まるでライブ会場ね：：」

「最終ブロックは予選と違って1試合1試合が全てこのフィールドで行われるからな。予選の時は各所に散らばっていた観客が、最終ブロックでは一斉にここに集まるわけだからこうもなるさ。」

「なるほどね：：」

そう言いながら、まりスはモニターに映る選手たちの顔をずらつと見る。

「それにしてもまあ、勝ち上がってくる選手に関しては大方予想通りといったところ

じゃない？」

「観客の予選突破予想ではイリスの名が挙がっていたが、やはり蟬相手では厳しかったようだな。」

「基本的な戦闘能力だけで見るなら一般のアークスより頭一つ飛び出てるぐらいだから、蟬相手なら仕方ないわ……。今度特訓してあげようかしら。」

「それは楽しみですね。マリスが教えるのであれば、次また戦う時があればその時は負けてしまうかもしれません。」

ふふつと余裕の笑みを見せながら蟬時雨は言う。

その様子から、口ではそう言うが、実際はまだ負けるつもりは無いのだろう。

『さあ選手紹介も終わったのでそれではさっそく……。ん？』

司会の進行が突然止まり、一時の沈黙が訪れる。

司会は自身の端末に届いた通知を開き、連絡の内容を一通り読み終えると口を開く。

『おおつとこれは：：A. B. T運営部からルール変更の知らせだ!!なんと今回の最終ブロック、イデアルシリーズによる武器制限を解除し、普段扱っている武器の使用が可能に!!そして個々の持つ能力も解禁して良いとのことだああああ!!これは予選以上の激しい戦いになること間違い無しだ!!!守護輝士とそれらに並ぶとも言われる実力者達の本気の戦いが見れるぞおおお!!!!』

ナウシズでも名だたるアークス達の本気の戦いを生で見ることが出来る。

観客たちはより一層の盛り上がりを見せた。

「はあ?! 能力使えるならあるふいなんかけちよんけちよんだったわよ!」

「ちよつ、落ち着いて姉さん! そもそも能力ありの手合わせでもあるふいさんに勝ったことないでしょ!」

「うっさいわねクレハ!! あれはただの手合わせだから手を抜いているだけよ! 本気を出せば少しは—」

「モミジ、残念だけど、お姉ちゃんも手合わせの時は本気出してないよ。」

「ん なつ… みにふいちちゃんまで…!!」

…一部不満を持つ観客もいるようだが。

「なんだかあの辺り、賑やかですね。」

「あるふいさんの妹さんと、友人さんかな?」

「いリスも同じこと思ったりするんですか?」

「んー… 能力が使えたところで、その時はスリス姉さんも同じことだから、どちらにしろ勝てないんじゃないかなあ… あの人の場合、それだけ自分の能力に自信があるんだと思うよ。」

観客席でセラフイムといリスが話し合う中、フィールドに並ぶ者出場者達も、今回の

突発的なルール変更について話していた。

「へえ、面白いことを考えるじゃないか。」

「そんな簡単にルール変えちゃって大丈夫なの？」

「どちらにしろ、本戦では同じルールになるからな。早めに体験できると思えば、問題ないと思うぞ。それに…。」

あるふいは他の出場者達の様子をチラリと見てから言う。

「どうやら全員、やる気は十分なようだしな。」

『それではさっそく始めていこう！第一試合の出場選手以外は控え室で待機しててください!!』

司会の指示に従い、あるふいとアリス以外の出場者はその場を去っていく。

「……さて、まずは私たちが…スクナから聞いたぞ。秘策があるようだな。」

「うん。まだ付け焼き刃だけだね。でも、いい勝負にはなると思うよ。」

「なるほど、それは楽しみだ。」

軽く言葉を交わしながら、2人とも決められた開始位置へと向かう。

『さあ…まずは第一試合！ナウシズの守護輝士、あるふい対!!ハルコタンの黒の巫女、アリスの試合だあ!!』

再び歓声が湧き上がる。

『両者とも既に配置に付き、準備は万端のようだ!!それではさっそく始めていこう!!』  
お互いに武器を構え、司会の合図を待つ。

『∴ 最終ブロック第1試合!あるふいvsアリス!試合スタートオオオ!!!』

## 第4話 「黒き死神 v s 黒の巫女」

『―最終ブロック第1試合！あるふい v s アリス！バトルスタートオオオオ!!!』  
「行くよ！あるちゃん！」

試合開始のブザー音と同時に、まず先に動いたのはアリスだった。

愛刀である”レンゴクトウ・グレン”を構え、一気に間合いを詰める。

『まず動いたのはアリスだ！あるふいとこの接近戦に持ち込むつもりだあ！』

「来い！アリス！」

向かってくるアリスに対し、あるふいもカタナを構え応戦する。

ガキンツ!!という刃が激しく交わる音が鳴り響き、続けざまにアリスは素早い連撃で斬り込む。

あるふいもそれを防ぐように、幾度となくカタナを交える。

「アリスさん、開幕で一気に仕掛けに行きましたね。」

セラフイムとまりスの弟であるいリスは、観客席から試合の様子を見ていた。

「アリスさんはカタナでの戦いがメインだからね。あるふいさんに遠距離からの攻撃が可能なロッドやライフルを使わせない距離まで詰めて戦うのが1番良いと思うよ。た

だ…… あるふいさんの最も得意とする武器がカタナであるという点を除けばだけど……」

「え？あるふいさんて普段からロッドで戦っているイメージがあるのでそれが一番得意なものとはばかり……」

「姉さんから聞いたんだけど、あるふいさんが言ってたらしいよ。」最も得意とするものは、普段は使わずここぞと言うべきに出すべきだ”って。元々ブレイバーを扱っていたこともあって、カタナにおいては他の武器種よりも数段得意なんだってさ。」

「でも、今回は最初から使っているんですね。」

「そこはきつと間合いの問題だよ。ライフルに関しては明らかだけど、ロッドは近接も出来るけど今のアリスさんのように至近距離に詰められると上手く武器を振り回せない。あるふいさんの実力ならそもそも近づけさせない戦い方もできると思うけど……観客を意識してるのかな？」

2人が話す間も、あるふいとアリスは何度も刃を交えていた。

アリスの猛攻をあるふいは幾度となく受け流し、ところどころに反撃を織り交せる。『アリスが果敢に攻め立てる!!あるふいも合間を縫って反撃を仕掛けるが、完全に攻めに転じられないでいる!これは僅かながらアリスが優勢か!?!』

実況の通り、試合が始まってからしばらく、アリスは途絶えることなく攻撃を続けて

いた。

僅かな隙を突いてあるふいも反撃を繰り出す、その全てをアリスは捌き再び斬り込む。

だがそれを何度か繰り返しているうちに、変化が起きた。

—アリスが押されはじめている。

「…くっ！」

「どうしたさつきまでの勢いは。早くその秘策とやらを見せてくれないんだぞ？」

攻勢一転、あるふいがアリスへ斬り込む。

アリスはあるふいの連撃を必死になって受け流す。

『おおっと先程まで果敢に攻めていたアリス！息切れかあ!?!ここに来てあるふいが本格的に反撃を開始したあ！アリスはこの猛攻を凌ぎきれれるのかあ!?!』

「どうして急に…」

セラフイムがその状況を見て不思議に思う。

先程まで圧倒して攻めていたアリスがいつの間にか防御に徹しているのだから無理もない。

「多分、あるふいさんの反撃一つ一つが、アリスさんの攻撃の軸をずらしていったんだと思う。ペースが乱れば攻めるアリスさんは余計にスタミナを使うし、手数も完全じゃなくなる。必要最低限の攻撃で、先手を打ってくる相手のペースを乱す…。これがあるふいさんの戦い方……」

なおも続くあるふいの反撃に、アリスは防戦一方となっていた。

「この程度でペースを乱されているようでは、まだまだだな。」

「ハッ…っ!!」

続くあるふいの連撃を、ただひたすらに防ぐ。

しかし反撃の間など無く、なんとか息を整えようと距離を取ろうとするとほぼ同じタイミングで距離を詰めてくる。

そんなアリスを見かねたのか、彼女の内に宿る力が声をかける。

「—だから最初から私と替わっておけばよかったのに…随分と無茶をするじゃない。(今の自分の力でどこまで渡りあえるかと思ってやってみただけれど… やっぱあるちゃんは強いなあ……)」

「もう十分腕試しはできたでしょう？久方ぶりの強者との戦いに気持ちが良いよ。早く替わってくれない？」

「まったくもう、せっかちなあ……分かったよ。あとは存分に戦っておいで—」

なんとか攻撃を防いでいたアリスの手がピタツと止まり、あるふいの一振りがアリスに届きかける。

だがその刃が届く間際、アリスの周囲に炎が巻き上がり刃を押し返した。

あるふいはそれを見て咄嗟に後ろへ下がりがり、様子を伺う。

『おおーつとなんだああれは!?!突如アリスの身の回りを激しい炎が取り囲んだあ!!!』

「……なるほど、それが秘策というわけか。」

炎の中から感じる覇気から、何かを察するあるふい。

アリスの周囲に巻き上がっていた炎が四散する。

服装に変化はなかったが、髪の毛先は燃えるようになびき、瞳からは常に炎がごうごうと燃え盛っていた。

「初めましてと言った方がいいかしら。ナウシズの守護輝士。」

「実際にこうして話すのは初めてだな。スクナから存在自体は聞いたことがある。会えて嬉しいよー」

「【薪炎<sup>ア</sup>の魔眼<sup>ス</sup>】」

\*\*\*\*\*

フィールドを、炎を纏った無数の武器が飛び交う。

使用者の周囲から放たれるそれは、一直線に対象へと向かう。

「くそっ… やりづらいな…!!」

向かってくる武器を躲し、【薪炎<sup>ア</sup>の魔眼<sup>ス</sup>】の懐へと入り込むが、薙刀、刀、双剣、短剣…

次々と切り替わる得物に間合いを狂わされ、あるふいは翻弄される。

立て直そうと後ろに下がると再び炎纏の武器があるふいへと降り注ぐ。

なんとか全てを防いではいるが、なかなか攻め手に欠けていた。

「この程度でペースを乱されているようではまだまだだね、ナウシズの守護輝士さん。」

さきほどアリスに対し放った言葉をそっくりそのまま返され、あるふいは思わず苦笑いをする。

『まるでさつきまでとは別人のような圧倒的な攻めを見せるアリス!!これがアリスの能力か!?再び守りに転じたあるふいだが、この猛攻を再度返すことはできるのかあ!』

「… まったく、仕方がないな……」

小さく呟くと、あるふいは飛び交う武器を防ぐ合間に持っていたカタナを素早く納め、ロッドへ切り替える。

「今度はテクニックでなんとかするつもり? いいわよ、やってみなさい。」

【薪炎の魔眼】は腕を振り上げ頭上に無数の武器を顕現させ炎を纏わせる。

上げた腕を振り下ろすと同時に武器はあるふいへと向かっていく。

そして――

あるふいはその手にもつ武器、”グリムリーパー”を一振する。

その一振によって、あるふいへと放たれた武具が全て消し飛んだ。

「っ!？」

【薪炎アの魔眼ス】は驚きを隠せなかった。

先程までとはまるで違う圧倒的な威圧感に僅かに足がすくむ。

(まさかこれは… 恐れ?この私が……?)

「最終ブロックは始まったばかりだからあまり使わないでいたかったが、相手が相手だ。」

そう言い放つあるふいの瞳と愛用の武器である”グリムリーパー”のフォトンで形成された刃は、血のような深紅に染まっていた。

「悪いが、ここからの対戦相手のことを考えるとあまり長くは使っていたくないんだ。一撃で決めさせてもらおうぞ。」

「…へえ、この私を一撃で落とせると…… まあいいわ、私もこの状態でいられる時間には限りがあるからね。一撃で灰塵にしてあげるわ。」

お互いに武器を構える。

僅かな時間、無音に近い静けさが会場を包み、観客達も思わず息を飲む。

刹那、あるふいが一気に突っ込む。

(っ!?!速い!!)

今までとは桁違いの速さに【薪炎<sup>ア</sup>の魔眼<sup>ス</sup>】の反応が僅かに遅れる。

無数の武具を飛ばし、遅れを取り戻そうとするが、あるふいはそれらを“グリムリーパー”で弾きながらも、減速することなく突っ込んでいく。

一瞬で距離を詰め、懐に入ったあるふいは、フツと【薪炎の魔眼】の前から姿を消す。

(この殺気……後ろっ!!)

「ふんっ!! 気配がただ漏れよ!!」

背後に視えたあるふいに対し、構えていた“レンゴクトウ・ヒガン”を力強く振るう。

だが――

「っ!?!」

背後に現れたあるふいに確実に当てたはずの刃は物体を斬るような感触はなく、ただ空を切る。

それと同時に、真っ二つとなったあるふいの姿は、霧のようにふわっと消えた。

「これは……幻影っ!?!」

「ファントムらしい技だろうか? もっともそれは、対人でしか通用しないがなっ!!」

あるふいは消える前と同じ【薪炎<sup>ア</sup>の魔眼<sup>ス</sup>】の目の前にいた。

力を溜めた渾身の蹴りが、隙を見せた【薪炎<sup>ア</sup>の魔眼<sup>ス</sup>】に直撃する。

「ぐううっ…!!」

十分な防御ができず、もろに蹴りを受けた【薪炎の魔眼】は激しく吹き飛ばされる。

なんとか地面に着地し、反撃を行おうと顔を上げヒガンを構え直した次の瞬間――

『決まったあああああ!!! さすがは守護輝士あるふい! 満を持して準決勝へと進出だああああ!!!』

「ちよつと待ちなさい! 私はまだ戦えー」

(私たちの負けだよ【薪炎の魔眼】。自分の立っている場所をよく見て。)

観客の大歓声によって【薪炎の魔眼】の声が掻き消される中、宿主の声が彼女の脳にはつきりと伝わる。

「……っ!!」

【薪炎の魔眼】の立っている場所。

そこはまぎれもなく、フィールドの場外だった。

あの蹴り1発で、あつという間に数十メートルも飛ばされていたのだ。

状況を理解した【薪炎の魔眼】は、武器を納め、やれやれといった様子で大きくため息を付き、愚痴をこぼす。

「……はあ… まったく、これだからルールのある試合は苦手なのよ。」

(まあまあ、私達だってまだ完全に”撃”に慣れていない状態だったし、どちらにせよ時

問の問題だったでしょ?)

宿主に正論を言われ、【薪炎<sup>ア</sup>の魔眼<sup>ス</sup>】は口を紡ぐ。

そこに、フィールド内からあるふいが【薪炎<sup>ア</sup>の魔眼<sup>ス</sup>】へ声をかける。

「久しぶりに良い相手と巡り会えた。ところで、まだその戦い方には慣れていないんだろう? 完全にものにした時にまた、勝負をしようじゃないか。」

あるふいの挑発的な言葉に【薪炎<sup>ア</sup>の魔眼<sup>ス</sup>】は一瞬イラつきを見せたが、すぐに落ち着きフツと笑う。

「ふんっ……傲慢甚だしいわね……いいわ、覚えておきなさい。次戦う時ははルール無用の真剣勝負よ。せいぜい私を失望させないように、腕を鈍らせない事ね。」

その言葉を最後に、アリスの身体がふらつと揺れる。

「つとと……急に戻らないでよう……」

ふらつきながら小言を言う姿を見て察したのか、あるふいの雰囲気は少し優しくなった。

「ふむ……悪くない太刀筋だったぞアリス。だがその秘策、ルールがそのままなら使えなかったぞ?」

「大丈夫よ。だってルール変更の提案をしたのは、他でもないヒメ様だもの。」

「……なるほどな。通りで2人とも、ルール変更の時に僅かににやついていたわけ

だ。」

あるふいはやれやれといった様子で両手を軽く上げる。

「どうしてアリスさんは、最後に正面にいるあるふいさんではなく背後に攻撃を振ったんですかね？」

「：。姉さんから聞いたことがあるんだけど、あるふいさんは殺気だけで、相手に幻影を見せることができるって言うてたよ。さっきの様子だと、『背後から襲う』という殺気をアリスさんにつけることで、アリスさんはその殺気から背後にあるふいさんの幻を視てしまつて、そこに向けて武器を振るつたんだと思う。」

いリスの言葉にセラフイムは啞然とする。

このような恐ろしい技を扱えるあるふいが第1回A・B・Tの本戦1回戦で敗れたというのだ。

ナウシズ以外の守護輝士も、このように異次元の強さを持っているのだろうか：。

なおも止まぬ大歓声の中、あるふいとアリスの退場を確認した司会は大きく声をあげる。

『さて!!!まだまだ最終ブロックは始まつたばかりだ!!!ボルテージの配分を間違えて終盤でへばるなよお!?!それでは続いて第2試合、選手入場!!!』

## 第5話 「ナウシズの双星」

『第2試合、選手入場!!!』

入場を促す司会の声に応じ、フィールドに2人の少女が現れる。

『これも何かの巡り合わせか！ナウシズの双星がここに揃う!!』双星の一”クオン!!”そして相対するは、”双星の二”リランだああああ!!!』

歓声と共に大きな盛り上がりを見せる観客達に対し、フィールドに立つ2人は静かに、お互いを見据えていた。

(この日のために2日間しっかりと特訓してきたんだ…大丈夫、今の私ならクオンに勝てる。)

リランはパンパンツと顔を2度両手で叩き気合を入れると、武器である”グランスティル”を構える。

「クオン、この試合であなたが負けたら、双星の肩書きを入れ替えるっていうのはどう？」

「へえ…随分と強気だねリラン。いいよ。でも今回は、前回以上に負けられないんだよね。」

クオンも自身の武器「桜剣ブルクラケウス」を構える。

『両者とも既にやる気満々のようだ!!それではさつそく始めよう!最終ブロック第2試合!クオンvsリラン!バトルスタートオオオオ!!』

試合開始のブザー音が鳴り響く。

「それはこつちも同じっ!!」

その言葉と同時に、リランが素早く前に出る。

クオンも迎え撃つように同じく前へと出る。

2人は互いに至近距離へ入ると、同時に武器を振るつた。

互いの武器が強くぶつかり、その後も激しい打ち合いが幾度となく繰り返される。

『おおつとこれは第1試合とは違い、開始早々に両者共に攻めの構えだ!!!この試合、どちらが先に優勢となるのかあ!?!』

その後も両者とも決して下がることはなく、互いに回避と防御を交えながら攻撃を加えていく。

手数は少ないが一撃が重いウオンド。

一撃は軽いが手数が多いダブルセイバー。

お互いの欠点を補い、戦場においてナウシズ最強のエトワールコンビと称される2人が、今は互いに相争っている。

リランが手数で攻め、クオンがそれを防御し、合間を縫って強力な一撃を放つ。

リランはそれをダブルセイバーで素早く受け流し、ウオンドの威力に引けを取らない強力なカウンターを繰り出す。

さらにクオンはそれを防ぐ……序盤から戦いは苛烈を極め、観客達は早くも、大きな盛り上がりを見せていた。

「お互いすごい気迫と勢いですね。最初からせめぎ合いです……」

「実力が拮抗している分、少しでも手を緩めて相手のペースにさせてしまったら取り返しがつかない。それをお互いに理解しているからこそ、最初から全力なんだろうね。」

数十回の激しい攻防の末、両者共に一度距離を取り、息を整える。

「やるじゃんリラン。3度は確実に当てたと思っただけど、見事に受け流されちゃった。」

「私も、2度は当てたと思っただけどね。お互い、2日間の特訓の成果が出てるってことかな。」

「そうかもね。それじゃあ……これも相手にできるか、試してみようかな!!!」

クオンはそう言うと、ほんの少し距離を取り、すぐさまデュアルブレードへと切り替える。

「デュアルブレードか……!!!」

リランは再び武器を構え、クオンが一気にリランへと踏み込む。

再び、互いの武器が激しくぶつかり合う。

「クオンさんのデュアルブレードの扱いって、ウオンド程じゃないですよね。返って不利なのは…」

「でもここであえて出してきたってことは、何かあるんだと思う。」

クオンの奇妙な作戦に疑問を感じるセラフィムといリス。

そんな2人をよそに、クオンとリランは互いの武器を何度もぶつけ合う。

先程と同じく、一進一退の攻防を繰り返すクオンとリランだが、しばらく刃を合わせた後に、クオンが仕掛けに行く。

「ウォーミングアップはここまで。ここからが本番だよー！」

クオンはエッジを残しながら後ろに下がりつつ、素早くウオンドへ切り替え、エッジがリランに当たると同時に高密度のフォトン帯“ルミナスフレア”を放つ。

「っ!？」

2方向からの同時攻撃に対し、リランは危なげなく回避を行う。

体勢を立て直そうと一度距離を取ろうとするが、ウオンドから放たれた吸引力のフォトン“ブラックホールラプチャー”によってリランの動きが阻害される。

そこへ再び、デュアルブレードのエッジがリランへと襲いかかる。

「どう？リランもダブルセイバーばかり使ってないで、他の武器種も手を出してみたら？」

クオンはそう言いつつ、ウオンドとデュアルブレードを巧みに使い回し、リランのペースを崩す。

『おおつとここで遂に長く続いた均衡が崩れたかあ!?クオンのウオンドとデュアルブレードの2種の武器による巧みな立ち回りがリランを苦しめる!!!』

「っ!!…このっ!!」

完全にクオンのペースに飲まれ、攻撃の機会を失ってしまったリラン。

なんとか形勢を戻すため、リランは自身の持つダブルセイバーに力を込めた。

「:…」 グランステイル”…:… 拘束解除!!!」

リランの声に応じるように、彼女の持つダブルセイバーが形を変えていく。

一目見るとソードと見てもおかしくはないであろうリランの武器は、まさに両剣と呼ぶに相応しい、ダブルセイバーの本来あるべき形となった。

武器の拘束を解除したリランは、クオンの猛攻を素早く掻い潜り、懐へと近づいていく。

『ここでリラン反撃に出る!!クオンの攻撃を素早く避けながら、間合いへと踏み込んでいくう!!!』

「やるじゃん．．．もし私がデュアルブレードじゃなくダブルセイバーを使っていたら、負けていたかもね！」

クオンは手をとめず、間合いを詰めようとしてくるリランに対しなおも攻撃を続ける。

デュアルブレードのギアを飛ばしながら、「ブラックホールラプチャー」を展開し動きを阻害する。

だがリランはそれらを難なく躲し、ついにクオンとの距離はリランの間合いにまで近づいた。

「もうそんな小賢しい手は通用しない!!」

リランはクオンに対し、解放した“グラランスティル”による連撃を叩き込む。

クオンはウオンドによるフォトンのバリアでそれを防ぐ。

だがリランはそれに構うことなく、バリアに対したただひたすらに攻撃を続ける。

『クオンはひたすらに守り、リランはひたすらに攻める!!この競り合い、どちらが先に息を切らすのかあ!』

「くっ．．．!!」

少しして、クオンの顔色が怪しくなる。

リランの攻撃を耐え続けていたバリアに、ヒビが入り始めたのだ。

リランはなおも、攻撃を続ける。

「バリアが壊れるまで殴り続けるなんて… 無茶苦茶過ぎるって!!」

「これが私の全力だああああ!!」

リランの力を込めた強烈な一振によって、ついにクオンのバリアが割れる。

「っ!!」

「はああああ!!!」

リランは「グランスティル」から巨大な剣を生成し、それを力強く蹴り放つ。

「ぐううう…!!」

クオンはギリギリの所でバリアを再展開するが、放たれた巨大剣をまともに受け、徐々に後方へ押し出されていく。

『リランの“セレスティアルコライド”を正面からまともに受けたクオン!!このまま場外へと押し出されてしまうのかあ!?!』

「…… やっぱり、リラン相手に… 温存はできないね…!!」

このまま場外へと落ちてしまうかと思われた瞬間、クオンはバリアを解きながら体を回転させることで巨大剣をなんとか受け流す。

「っ… だめか… ならもう一度…!!」

「…… もう一度”だなんてそんな甘い考えは通させない!”双星の”の力、見せて

あげる!!」

リランが再びクオンへと近づこうとする中、クオンは1度大きく深呼吸し、武器である”桜剣プルクラケウス”を掲げる。

「真名解放：：起きて!!アルトリウス!!!」

クオンが声を上げると、”プルクラケウス”に付けられたリボンがスルスルと解かれる。

完全にリボンが解かれると、武器全体を白く輝くフォトンが包み込む。

『これは：：ついにクオンも本気モードだ!!!双星同士の本気のぶつかり合いだあああ!!!』

”真櫻剣アルトリウス”：：クオンさんも本気ですね。」

「：：勝負あったね。」

「え?」

セラフィムはいリスの言葉に首を傾げる。

「ここからもう一悶着あると思っただんですが：：いリスから見たらもう勝敗は決まってるんですか?」

「うん。たぶん、答えはすぐ分かるよ。」

クオンとリランが再び激しくぶつかり合う。

最初の数回は互いに一進一退の攻防を繰り返していったが、その均衡はすぐに崩れ去った。

「うぐつ…！」

リランが僅かに押し込まれていた。

『おおつとリラン早くも押し負けている！これはさすがに先ほどの無理な攻めもあつて息切れかあ!?』

クオンのバリアに対する強引な攻め、長時間の拘束解除により、「グランステイル」は既に消耗しきつてしまっていた。

「リラン、残念だけど、もう詰みだよ。それでもまだ試合を続ける?」

”アルトリウス”による殴打やフォトンのビームがリランを襲う。

リランは必死になってクオンの攻撃を防ぐが、ビームの衝撃により後方に大きく飛ばされる。

(くそつ…!!あそこで押し出しきれなかったせいだ…!もつとギリギリまで解放を温存して、セレスティアルコライドの威力に更にブーストをかけられたら…!!)

なんとか踏みとどまったリランは、そんな事を考えながらクオンを見据える。

「…あそこで決めきれなかったから、もう少し武器の解放を遅らせておけば…そう思ってる?」

「っ!？」

クオンの核心を突いた言葉にリランはドキツとする。

クオンは驚くリランに対し、静かに語りかける。

「PVPにおいて1番大事なのは、相手の行動に対して自分がどう動くかじゃなく、自分が動きやすいよう相手にどう立ち回らせるかだよ。例えば、遠距離攻撃を多用して近づかせないようにすることで、相手は無理矢理近づこうとして自身にブーストをかける、とかね。」

「まさか…っ!」

「もう分かったみたいだね。」

リランは理解した。

これまでの戦いの経緯全てが、クオンの計算通りであったことに。

「くっ…うああああ!!」

リランはこれまでの操られていた試合の流れに、悔しさのあまり雄叫びを上げながらクオンへと迫る。

それに対しクオンは、周囲に多数の方陣を展開する。

「これで終わりだよ…」ルミナスフレア・イクシード…フォイア!!」

方陣とクオンの持つ「アルトリウス」から凝縮されたフォトンのビームがリランへ

放たれる。

「ぐっ……!!」

数発受け流すことはできたが、今のリランにそれ以上を防ぐ力は残っていないかった。残りのビームがリランに被弾する。

「ぐっ……うああああっ!!」

リランが吹き飛ばされると同時に、モニターのHPバーが0になる。

『き……決まったあああああ!!!クオンとリランのエトワール対決!!リランの戦闘不能により、クオンの勝利!!!双星の一”の威厳を示したああああ!!!』

試合終了のブザー音と共に、観客の歓声が飛び交う。

クオンはリランの元へ近づくと、リランへと手を差し伸べる。

リランはその手を掴み、クオンに助けられながら起き上がる。

「っ……はあ……やつぱり強いなあクオンは……」

「特訓してるのはリランだけじゃないからね。」

「この2日間、あるふいの対策ばかりしていると踏んで油断していると思ったのだけど……」

「ん？私はリランとの対戦もちゃんと考えて特訓してたよ？」

「嘘……だって2日間しか無かったのに2人分の対策を練るなんて……」

「相当きついだらうね。ましてやそのうちの1人はあるちゃんなわけだし。だから―」

「2日間VRルームを貸し切ってそこで生活した!!」

「!?!」

クオンの衝撃的な言葉と圧倒的な練習量の差に、リランは目を大きく見開き口をあんぐりと開け、しばらく返す言葉を失ってしまった。

「…………… はは… そりゃ勝てないや…」

『開幕から最後の最後まで、手に汗握る激戦を見せてくれた彼女らに盛大な拍手を!!』  
観客の拍手に見送られながら、クオンとリランは退場していった。

「…………… それではこの興奮を維持したままさっそく第3試合へと行こう!!… 最終ブ  
ロツク第3試合! 両選手入場!!!」

## 第6話 「英雄2人」

『第3試合はこの2人!!ウルの元守護輝士、ユウ!そして対するは守護輝士に並ぶ実力者、蟬時雨!!』

歓声がフィールドに現れた2人を迎える。

「よろしくお願いしますね、蟬さん。」

「ええ、お互いに全力を尽くしましょう。」

(予選の試合を度々見てはいましたが、ユウの実力はあまり測れなかった…。まずはどれほどのものか、試してみる必要がありますね。)

『直前の第2試合はエトワールクラス同士の対決だったが、今回はヒーロークラス同士の対決だ!!さてさて、両者とも準備はいいかあ!?!それではさっそく始めよう!最終ブロック第3試合!!ユウ対蟬時雨!!………バトルスタアアトオオオ!!!』

まず先に仕掛けたのは蟬時雨だった。

手始めに、ツインマシンガンをユウに向かって放つ。

ユウはそれを素早く避けつつ、同じように蟬時雨に向けてツインマシンガンを放つ。

両者の撃ち合いがしばらく続く中、突如ユウがタリスによるワープで蟬時雨の背後へ

と回り、ソードを横薙ぎに払う。

蝉時雨はそれをジャンプしながら避け、持っていたツインマシンガンでソードへと切り替え、着地と同時に振り上げる。

一方ユウは、振り払ったソードを既に構え直し、それを力強く振り下ろす。

互いのソードが激しくぶつかり合い、大きな音を立てる。

僅かな罅迫り合いの後、更にソード同士による打ち合いが続く。

ユウはタリスを巧みに使いこなし、蝉時雨の背後や頭上を取りながらソードを振るっていく。

蝉時雨も負けじと、しっかりとユウの動きに対応する。

「すごい……これがハイレベルなヒーロークラス同士の戦い……」

セラフイムは驚嘆する。

ヒーロークラスは後継クラスの中でも特に打撃、射撃、法撃をバランス良く使い分ける事が大事なクラスだ。

だがそれらを使い回そうとした時、どうしても武器を切り替える際のタイムラグなどによって隙が生じてしまう。

しかしユウと蝉時雨にはそのような隙が一切存在しなかった。

各種武器を巧みに使い回しながらの激しい攻防がしばらく続き、その後お互いに1度

距離をとる。

「… いい動きですユウ。さすがはウルの守護輝士をやっていただけのことがありますね。」

「蝉さんこそ、なぜ守護輝士ではないのか不思議に思う程の強さですよ。」

「私はあの2人ほど、実績も基礎的な能力も高くありませんから。それに、戦場に出て戦うのはあまり好きではないんですよ。」

「… にはしては楽しそうに戦うじゃないですか。」

「あなたが相手だからですよユウ。友人との試合は今後の連携にも役立ちますし、同じヒーロークラスである以上、戦い方に関して参考にできる部分が見つかるでしょうから。」

蝉時雨はフツと軽い笑いをしながら、頭の中で今後の作戦を練る。

「… ここまでは善戦出来ていますが、やはり純粋な戦闘力ではユウの方が上ですか… 多少の消耗は覚悟で、いくつか外す必要がありそうですね。」

「さて、もう少しあなたの動きを見てみたいところですが、試合の制限時間があまりありません。少し、本気を出させてもらいます。」

蝉時雨は1度深呼吸をし、その後再び口を開く。

「… プロテクション・ドライ、リベレイト、拘束制御術式3号、解除!!」

蝉時雨の纏うフォトン量が一気に跳ね上がる。

見た目に変化はないが、対立するユウからして見れば、明らかに雰囲気が変わったのを感じ取れた。

「蝉さんの拘束制御術式… 話には聞いていましたが、実際に目の当たりにするのは初めてですね。」

「1段階解除するだけでも身体に多少の負担がかかりますからね。戦闘に滅多に出ないうえに、極力使わないようにしているので、実際に見たことがないのも無理ありません。」

蝉時雨はソードを構え直す。

「さて、第2ラウンドといきますよ…!!」

\*\*\*\*\*

互いのソードが何度も激しく交わる。

ツインマシンガンによる撃ち合いやタリスによる裏の取り合い。

お互いにヒーロークラスとしての戦い方をフルに活用し、一進一退の攻防を繰り広げる。

『両者共に一切引けを取らないぶつかり合い!!どちらが先に崩れるかあ!?!』

(くっ… これでも決定打にはなりませんか…!!)

潜在能力の一部を解放した蟬時雨だが、ユウを押し切るには未だ十分とはいえないものだった。

蟬時雨に僅かに焦りの表情が現れる。

(このままでは埒が明きませんね… 長引けが長引くほどこちらの消耗が激しくなる一方…… なら!!)

「… プロテクション、ツヴァイ  
拘束制御術式2号、リベレート解除!!」

一瞬距離をとり、蟬時雨は更に自身の力を解放する。

「っ!!」

今度は観客からも見てわかるぐらいに、蝉時雨の身の回りをフォトンが激しく巻き上がる。

「すごいフォトン量… あれが蝉さんの本来の力…!!」

「あれ程のフォトン量でまだ全力じゃないなんて… さすがスリス姉さん…!!」

蝉時雨の秘める力に感心するセラフィムといリス。

相対するユウは覚悟を決め、武器を強く握りしめる。

「さすがにこれは… 僕も本気を出した方が良さそうですね!!!」

張り上げた声とともに、ユウの髪が逆立ち、瞳の色が青からオレンジへと変わる。

「なるほど、それがあなた特有の… ヒーロータイムですか…!!」

（あるふいから話は聞いていましたが、実物を前にするとよく分かる… なんていう凄まじい覇気!!）

蝉時雨はユウから放たれる覇気を浴び、気持ちを押し潰されるような感覚に陥る。

だが負けじと武器を強く握りしめ、自分に喝を入れるように大きく声を発する。

「はっ!!」

蝉時雨は勢いよく、ユウに向かって飛び込む。

ユウも迎え撃つように前へと飛び込む。

互いに間合いに入ると、両者同時にソードを振り下ろす。

ソード同士が激しく衝突する。

2人の剣速は先程よりも遥かに増し、およそ大剣とは思えない速度で打ち合い始めた。

『これは目で追えなくなるほどの剣速同士のぶつかり合い!!!速い!!速すぎるうう!!!』  
何十合と打ち合う2人だったが、蟬時雨の剣速がわずかに鈍る。

「くっ…!!」

(やはりこの程度ではユウのヒーロータイム相手に有利は取れない… なら一か八か、ここで使うしかない!!)

蟬時雨はユウを1度引き離し、自身もさらに距離をとる。

「… ユウ、時間もありません。この一撃で決めましょう。これを受けてもなお、立っていられたらあなたの勝ちです。」

蟬時雨は大きく深呼吸をしながら、自信の持つ武器「光跡剣レリクシオン」を頭上へ掲げる。

「拘束制御術式1号… クロノリベレイト 限定解除!!」

蟬時雨の纏うフォトンが爆発的に跳ね上がる。

— 束ねるは星の息吹。輝ける命の奔流。

「っ!!」

徐々に、「レリクシオン」に光の粒子が集まるのを見て、ユウは全てを察する。

「… 分かりました蝉さん。ならば僕は全力で、それを迎え撃ちます!!」

ユウはその手に持つ”コートエッジVer3”を構え、強く握りしめる。

身に纏うフォトンが更に跳ね上がりながら、「コートエッジ”の輝きが増す。

周囲を漂う煌びやかなフォトンが、装甲のように刀身を包み込む。

―集いし光は極光となりて、深き闇を打ち祓う。

光の粒子は”レリクシオン”を軸にしながら、柱のように延びる。

「… その身に受けよ!!」

「薙ぎ払え!!」

「揺るぎない―」



るのかあ!?!』

激しい光が徐々に収まり、フィールド内が晴れていく。

観客全員が、2人の立つフィールドを凝視する。

—そこには、どちらも倒れることなく、お互いを見据えて立っている2人の姿があった。

『おおっとこれは見事に相殺されたか!?!あの激しい衝突が起きた後も、両者共に立ったままだあああ!!!』

蝉時雨が眩く。

「……なるほど……これがウルの守護輝士……やはり……強い……です  
ね……」

その言葉を最後に、蟬時雨はその場にバタリと倒れる。

同時に、蟬時雨のHPバーが0になる。

『これは……き、決まったあああああ……!!!!蟬時雨戦闘不能につき、第3試合勝者は……  
ユウだああああ!!!』

ユウは急ぎ蟬時雨に駆け寄り、肩を貸しながら立ち上がる。

そこに、待機していたメイカルチームが集まり、蟬時雨をタンカーへと横たわらせる。  
る。

「はあ……VRだから多少の無理は問題ないと思っていました……それでも反動は軽  
減されないようですね……」

横たわる蟬時雨は、どっと疲れた様子で小さく呟く。

「……蟬さん、どうして最後のあの時、本当の全力を出さなかったんですか？」

傍に立つユウの質問に、蟬時雨は少しの間を空けて答える。

「……あれから先は、ここで使つていいような代物ではないからですよ。かつての  
【深遠なる闇】のように、本当に強大な悪と対峙した時に、最終手段として使うものなん  
です。」

ほんの少し間を空けて、蟬時雨が続けて話す。

「：：さあ、あなたは次の試合に向けて少しでも長く休憩しておきなさい。次に勝ち上がる相手がどちらにしろ、今以上の消耗戦になるのは確実ですから。」

「分かりました。蟬さんも、ゆっくり休んでください。」

拘束を解除した反動によって動けない状態の蟬時雨は、メデイカルセンターの係員によつてタンカーで運ばれていった。

「蟬さん!!いくらVRでも、身体への負担は相応に掛かるんですからね!あんまり無茶しないでください!!」

係員の怒る声が蟬時雨の耳に響く。

「久しぶりに楽しかったものでつい……すみませんね、ナディア。」

「まったくもう……」

やれやれといった様子でナディアと呼ばれた係員はため息を吐く。

『激戦を繰り広げてくれた両者に、盛大な拍手を!!』

観客の拍手と歓声が会場全体を包み込む。

蟬時雨が運ばれていくのを見届けたユウは、観客の喝采を浴びながら、静かにその場を後にした。

「ちよつと僕、スリス姉さんの様子見てくるね!」

いリスはセラフイムに断りを入れると、急ぎ席を立ち、観客席を後にした。  
『さあそれでは続いて第4試合!! 選手… 入場!!!』

## 第7話 「白き戦姫 v s 白の巫女」

『第4試合：： 選手入場!!』

司会の声に応えるように、フィールドに新たな2人が入場する。

『第4試合の選手はこの2人!!あるふいと並ぶナウシズのもう1人の守護輝士、まりス!!そして対するは：： ハルコタンの白の巫女、アリシアだあああ!!!』

2人目の守護輝士の登場に会場は一層の盛り上がりを見せる。

そんな中、まりスは目の前に立つアリシアをまじまじと見つめる。

「：：：： その雰囲気、アリシアじゃないわね?」

「おや、さすがは守護輝士、理解が早いようですね。」

「普段あたしを前にした時のアリシアとは雰囲気全然違うもの。それ、アリスもやっていた技よね。」

「その通りです。私達ハルコタンの星ではこれを、“繫つなぎ”と呼びます。普段は巫女が私達《魔眼》の力の一部を行使するのに対し、“繫”は私達が一時的に巫女の器を借りることで、《魔眼》の力を最大限に行使するというものです。」

「つまり：： あるふいとシバみたいなものかしら。」

「そう思っていただけで構いません。当代の白の巫女は黒の巫女より”繋”の扱いに長けていたので、【薪炎敵の魔眼女】とは違い、こうして最初から【氷桜私の魔眼】が前に出ているのです。」

『それでは2人とも準備はいいかあ!?!?! 第4試合!! まリスvsアリシア!! バトル…:スタアアトオオ!!!』

まリスは試合開始の合図と同時に、”聖剣エクシオン”を構える。

「…武器を構えなくていいの?」

まリスは一向に武器を構えない【氷桜の魔眼】に疑問を投げかける。

「武器を出さずとも、私は戦えますから。」

「舐められたものね…。でも武器を出さないからといって、容赦はしないわよ!!」

まリスは勢いよく【氷桜の魔眼】へと突撃し、横薙ぎに”エクシオン”を振る。

未だ動かぬ【氷桜の魔眼】に直撃するかと思われた刹那―

ガキンツ!!

金属同士が激しくぶつかった様な鈍い音が鳴り響く。

まリスの”エクシオン”を防いだ正体は、【氷桜の魔眼】を守るように突如現れた、氷の壁だった。

「っ!!」

まりスは何かを察し、素早く距離をとる。

『おっと、まりスどうした!? 先手を打ったにもかかわらず素早く後退したぞ?!』

「へえ…これは中々厄介ね。」

見ると、氷壁に触れたエクシオンの剣先がほんの少しだが凍ってしまった。

「いい判断です守護輝士。もしあのまま無理に押し通そうとしていたら、私に届くよりも先に剣が凍って砕け散ってしまいましたからね。」

「なるほど…これが【氷桜の魔眼】の力つてわけね。」

まりスは剣先にまとわりついたままの氷を炎属性のテクニックで溶かそうとする。

「無駄ですよ。【氷桜の魔眼】の影響による氷は、私自身の意志か、【薪炎の魔眼】の炎でしか溶かせませんから。」

【氷桜の魔眼】の言う通り、炎属性のテクニックがエクシオンを包み込むが、氷は一切溶けることはなく、逆に消化されるかのように、燃え尽きてしまった。

「…貴方が勝利する方法はただひとつ。武器が完全に凍りつく前に、勝負を決めること。ただそれだけです。」

「そう、面白いじゃない。」

まりスはそう言うと、武器をソードからツインマシンガンへと切り替える。

「なら、それに触れないように戦えば問題ないってことよね!!」

\*\*\*\*\*

まりスはツインマシンガンで至る所から弾丸を浴びせるが、全てが氷壁に防がれてしまっていた。

タリスのワープを巧みに使い、多方面からの同時攻撃も試すが、それすらも全て氷壁によって防がれてしまう。

「どれだけ攻撃をしようとも、私に届かぬと知りながら……存外、粘りますね。」

「この程度で諦めるほどあたしは甘くないわよ。あんたも、いつまでも守つてないで、少しは攻めてきたら？」

「良いでしょう……なら、こういうのはどうです!!」

【氷桜の魔眼】は足場をトンつと音を立てて踏み直す。

すると踏み直した足先からまりスに向かって、氷が素早く這っていく。

「っ!!」

まりスはタリスで空高く飛び、這い寄る氷を避ける。

「そこです。」

空中のまりスに対し、【氷桜の魔眼】は氷の槍を複数生成し投擲する。

—氷桜流「氷槍無尽」

「くっ!!」

ツインマシンガンでは撃ち落とすきれないと察したまりスは、投擲された複数の氷槍を「エクシオン」の一振でまとめて砕き割る。

だが、氷槍を砕くと同時に、「エクシオン」の凍結が一気に進行する。

「……どうやら安全なところなんてどこにも無さそうね。」

「当然です。私はその気になればこのフィールド全体を氷漬けにすることも容易いですが、それではこの催しが面白くなってしまう。それでも、情けをかけている方なのですよ?」

「……へえ?」

【氷桜の魔眼】の言葉に、まりスの声色が僅かに怒りを露わにする。

「守護輝士に情けなんて、随分と舐めたこととしてくれるじゃない。なら、まずはあんたの

その余裕を無くすところからね!!」

まりスは先程と同じように、タリスのワープを駆使しながら、ツインマシンガンによる多方面からの射撃を浴びせる。

「またですか。残念ですが、その技が通用しないことは、先程証明したはずですよ。」

「それは、あたしが踏み込まなければの話でしょう?」

「っ!!」

気が付けば、まりスが“エクシオン”を構えて飛び込んで来ていた。

「いつの間に…!!」

「これが慢心ってやつかしら。上空からの射撃に気が行って、こんな簡単な侵入すら気づかないなんて…この距離なら、壁なんて関係ない!!」

まりスは“エクシオン”を勢いよく振るう。

ついに【氷桜の魔眼】に一撃入るかと思われた。

だが【氷桜の魔眼】に届くよりも前に、“エクシオン”が再び何かに阻まれる。

「!?!」

「…その素早い身のこなしは賞賛に値します。ですが、私の守りが氷壁だけだなんて、一体いつ言ったのでしょうか?」

『…これは、まりスの渾身の一撃が入るかと思われたが、アリシアの飛翔剣がそれを

防いだあああ!!!』

【氷桜の魔眼】の両手には、アリシアが扱う”残雪”が握られていた。

「それは……アリシアの……!!」

「ええそうです。彼女の持つ”残雪”に、私の氷を纏わせたもの。名はそうですね……  
”氷華残雪”とでも呼びましょうか。そして私の氷に触れたということは……分かり  
ますね?」

「っ!!」

気づいた時には既に、まりスの”エリクシオン”が完全に凍りついてしまった。

「……貴方の負けです。」

『まりスの持つ武器が完全に凍ってしまったああ!!!これば続行不可能か!』

「……ふん、あんまり守護輝士を舐めない方が良いわよ……【氷桜の魔眼】!!!」

「っ!」

まりスは無理やり、”エリクシオン”を押し込み【氷桜の魔眼】を弾き飛ばす。

「くっ……なぜ……なぜ砕けない!!」

「エクシオンにはね、相手に剣の間合いを分からせにくくするために、刀身が見えないよ  
う透過性のある特殊なフォトンの膜を纏っているの。」

「そしてこの膜は刀身が見えていたとしても完全に消えたわけではないのよ。だからあ

んたが凍らせようとしていたのは、エクシオンを覆っているフォトンの膜だっただけ。」

「まりスは凍った”エクシオン”をまじまじと見つめる。

「それにしても、これはこれで良い見た目ね。まるでクリスタルのように輝いていて、綺麗だわ。」

「」の…!!」

「さて、ネタばらしにだいぶ時間がかかってしまったわね。制限時間も残りわずかだし、この辺で決めさせてもらおうわよ。」

「まりスは片手で振り回していた”エクシオン”を両手で握り、力を込める。

「行くわよ… ”エクシオン”!!」

「まりスが声を上げると同時に”エクシオン”にまとわりついていた氷が弾け飛ぶ。

「同時に、まりスの背にフォトンで形成された羽が生える。

「これほどのフォトン量… 一体どこから…!!」

「どこも何も、あたしが元々持っているフォトンに他ならないわ。あんたは今まで、あたしの力のほんの一部にしか触れてなかっただけよ。」

「そんな馬鹿な… アリシアの記憶には、そんな桁外れのフォトンなんて…」

「そりゃあ無いでしょうね。これを今まで見たアークスは、あるふいと蟬といリスぐらよ。」

「…っ!!」

「あんたにはこれを使うだけの相手だと認めてあげる。さあ、自慢の氷壁であたしを止めてみなさい!!!」

まりスは勢いよく【氷桜の魔眼】へと突撃する。

「くっ…!!」

【氷桜の魔眼】は向かってくるまりスを止めるため、氷壁を幾重にも張る。

—氷桜流「多重氷壁」!!

だが、まりスは“エクシオン”で難なく氷壁を破壊していく。

「っ… まだです…!!」

【氷桜の魔眼】は無数の氷槍を生成し、まりスへと降り注がせる。

—氷桜流「氷槍無尽」!!

だが“エクシオン”による圧倒的な剣速によって、氷槍の全てが砕き落とされた。

「なるほど、これが守護輝士… どうやら、多少の無理は必要そうですね…!!」

—氷桜流奥義…「永久凍桜」!!

【氷桜の魔眼】は“氷華残雪”の片方を勢いよく地面に突き刺す。

すると、突き刺した場所から扇状に一瞬にして巨大な氷桜が出現した。

「っ!!」

「はあ… はあ… これでどうです… !! 守護輝士!!」

『なんとという大技!! 突然現れた氷塊に、まりスが飲み込まれてしまったあああ!!!』

氷桜に囚われてしまい、微動だにしないまりス。

だが数秒後—

ピキッ

氷桜にヒビが入り始める。

「なっ… まさか… !!」

ピシピシピシピシ… !!

氷桜に更に亀裂が入る。

直後、轟音と共に氷桜は崩れ落ち、砕けた氷による白い煙の中から、まりスが飛び出てくる。

「……言ったはずよ!!守護輝士を舐めるなってね!!」

まりスはついに【氷桜の魔眼】の目の前に辿り着く。

「とつた!!」

「くっ!!」

まりスは「エクシオン」を素早く振り上げ、思いつき振り下ろす。

【氷桜の魔眼】はなんとか受け止めようと、「氷華残雪」を頭上に構える。

（【氷桜の魔眼】……!!）

「っ?!待ちなさいアリシア!!今出てきてしまつては—」

大きな爆発音が鳴り響くと共に、フィールド全体が煙で見えなくなる。

『まりス、アリシアに渾身の一撃!!これは決着かあ!?!』

煙が徐々に消え、視界が晴れる。

「……っ」

「……急に出てきたら危ないじゃない、アリシア。」

『これは…… まリスの攻撃はアリシアに当たっていない!!わざと外したのかあ!!』

『ごめんなさい……【氷桜<sup>彼</sup>の魔眼<sup>女</sup>】がこれ以上無理するのを見ていられなくて……』

【氷桜の魔眼】の実力ならともかく、今のはあなたがこれをまともに受けたらいくらVR空間でも無事でいられる保証はできなかつたわよ?」

「まリスさんなら、気付いてくれると信じていたので。」

「…… た、たまたまよ。」

「…… た、たまたまよ。」

「それでも、さすがはまリスさんでした。ありがとうございます。」

アリシアの感謝の言葉に、まリスは照れくさそうに顔を背ける。

「あつ、そうだー」

アリシアは「残雪」を場外へ放り投げる。

「あつ……」

「どちらにしろ、今ので私の負けは決まっていましたから。」

『おおつとアリシア、ここで自ら武器を場外へと手放した!!これはルールにより……まリスの勝利だああ!!!』

司会の決着コールに、

観客席から歓声が巻き起こる。

「いいの？あんなことして。【氷桜の魔眼】が怒ったりしない？」

「元々、最後の技を突破された時点で、どうすることもできませんでした。それは、【氷桜の魔眼】自身が一番分かっているはずですよ。」

アリシアはさらに、言葉を付け加える。

「本当は私が表に立って戦いたかったんですけど…今の”繋”の練度じゃまりスさんとともに戦える気がしなくて…」

「じゃあ、アリシアとアリスがその”繋”つてやつを完全にマスターしたら、あるふいも混ぜてハルコタンで2対2なんてどう？」

まりスの提案に対し、アリシアは驚きつつ、少し間を空けてから答える。

「ええっと…【氷桜の魔眼】はやる気満々ですね…」

「それは何よりだわ。でもあたしが望んでいる戦いはアリシアの器を借りた【氷桜の魔眼】ではなく、【氷桜の魔眼】の力を最大限に扱えるようになったアリシアよ？」

「うっ…それはだいたい先になりそうですね…」

「ゆっくり慣れていったらいいわ。脅威が去った今、特訓するだけの時間はたっぷりあるもの。」

「…まりスさんとあるちゃんどこまで戦えるようになるか分からないけど…もつといい勝負ができるように頑張ります！」

『激戦を繰り広げた2人に盛大な拍手を!!!』

観客達の喝采を浴びながら、マリスとアリシアはフィールドを後にした。

『さあ!!最終ブロックの予選はこれにて終了だ!!そして時刻はちようどお昼!!ここでフィールドのメンテナンス等もあるので、1時間ほど各自休憩をとってください!!』

## 第7. 5話「休憩時間」

1時間の休憩が与えられた出場選手及び観客達。

昼食を食べながら、先程までの試合を思い返して盛り上がる者たち。

試合での選手達の激戦に影響を受けてか演習クエストに向かう者たち。

各々が休憩時間を自由に過ごす中、アリス、リラン、アリシア、セラフィムは、フラ  
ンカ、sカフェで昼食を摂っていた。

「ここに居ましたか。さながら、反省会といった雰囲気ですね。」

そこにもう2人、蟬時雨といリスが歩み寄る。

「大丈夫なの？ 蟬さん。そんなすぐ動いて…。」

アリスが心配そうに蟬時雨に問いかける。

「VR空間だったこともあってか、使用直後の反応は想定通りでしたけど、実際にかかっ  
た負担はそこまですりだしたみたいですよ。それに、いリスがフォトンを分けてくれたおかげ  
ですぐに動けるようになりました。」

「それは良かったです。じゃあ、座って一緒に食べましょう？」

アリシアに誘われ、蟬時雨といリスは同じテーブルに着く。

席に着いたばかりの2人は端末からメニューを開いていくつか料理を注文する。

「皆さん、試合お疲れ様でした。想像以上の大激戦で、びつくりしました。」

セラフイムが、最終ブロックに出場した4人に労いの言葉をかける。

「……まあ、私とアリシアに関しては、大激戦を繰り広げたのは私達じゃないんだけどね……」

アリスがごによごによと少し小さな声で言う。

「え、それってどういう……」

「えっとね——」

\*\*\*\*\*

セラフイムの疑問に対し、アリシアが「繋」について、その場にいる全員に説明した。「なるほど、そのような技がハルコタンにはあったのですね。」

「繋」について説明を聞いた後、まず最初に蟬時雨が口を開いた。

「結局私もアリシアも、あの2人には勝てなかったけどね。」

「でもその技を覚え始めたのは2日前でしょう？それであれだけやりあえたのですから、十分なのでは？」

「そうですね。本当はもう少し善戦したかったんですけど… やっぱり本気になった2人には歯が立ちませんでした。」

「まりスさんは謎の羽が生えるし、あるちゃんの蹴りは想像以上に強烈だし、あの2人だけでなく規格外なの…」

「まりスの”エクシオン”には私の”レリクシオン”と同じく、フォトン溜め込む特性があるんですよ。まりスがその身に備えているフォトンと”エクシオン”の溜め込んだフォトンを一気に放出すると、溢れ出たフォトンがあのように羽の形となって現れるんですよ。」

蝉時雨はまりスの羽について説明をすると、続けて試合中に【薪炎の魔眼】を一撃で場外へと飛ばしたあるふいの蹴りについて説明を始める。

「あの時見せたあるふいの蹴りはただの蹴りじゃありません。フォトンは本来、武器を通して使うことで初めて威力を発揮するもの。ですがあるふいの場合、武器を使わずとも、身体の一部に自身のフォトンとを纏わせて打ち込むことができます。武器を通さない点から、求められる技術とフォトン量は非常に高い為、能力によつてほぼ尽きることの無いフォトンとを扱えるあるふいだからこそできる芸当です。格闘技術に関しては、ファレグから教わったそうですよ。」

「うっそ… ファレグって、マザークラスターのあのとんでもなく強い人よね？あるちゃ

んやまりスさんが本気で挑んで、なんとか勝負には勝ったけど、直後にはピンピンしてたって…」

蝉時雨から事の次第を聞いたアリスは、最後の言葉に驚きを隠せなかった。

「そのフアレグを師としたあるふいの格闘術ですから、桁外れの威力も納得できるでしょう？あれでも手加減しているでしょうけど、少なくとも私はまともには受けたくないですね。」

「あはは…」

蝉時雨の言葉を聞いたアリスは、思わず苦笑いをする。

そんな様子を見ながら、蝉時雨は次にリランへ声をかける。

「リランは大丈夫でしたか？武器の方、かなり無理をさせてましたが。」

「思ったよりもダメージは少なかった。たぶんあのVR空間、実害が出ないように本来よりも早めに限界を迎えるようになっていられるのかもしれない。」

「…なるほど。私があの場合を出た後、身体が少し楽になったのもそれなら納得がいきます。」

「でも驚きました。リランがあんなに鬼気迫る勢いで暴れてるの、初めて見ましたよ。」

セラフイムが述べた感想に対し、リランは少し恥ずかしそうにしながら答える。

「あれはその…相手がクオンだったっていうのもあったからつい気合が入っちゃっ

て…」

「そのように全力で挑める相手がすぐ側にいるというのは良い事だと思えますよ。ただあの暴れっぷりは、普段のリランからはとても想像できない立ち回りでしたけどね。」

ふふつと笑う蟬時雨を見て、リランは少しむすつとした顔をしながら言葉を返す。

「そういう蟬さんも、ユウさん相手に結構本気だったじゃん。」

「ユウの実力を推し量るには、あそこまで解放しなければならぬと思ったからです。今回負けはしてしまいましたが、十分な情報を得ることが出来ました。」

「その感じだと、次は勝てるってこと？」

「…それはどうでしょうね。私やあるふい、まりスと違い、能力にあまり頼らず、自身の持つ力のみで守護輝士にまで上り詰めた正真正銘の実力者です。きっと私が今回得た情報をもとに様々な作戦を仕掛けたとしても、機転を利かせてすぐ対策されてしまうでしょうね。」

「それは次また負けた時用の保険？」

「…リラン？」

一瞬空気がピリつく。

あるふいやまりス程ではないにしろ、彼女も負けず嫌いであることには変わりないのだから、癪に障るのも分からなくもない。

蟬時雨以外の全員が理解した。

あ、これ説教怒られるやつタイムだ。

「……ごめんなさい。なんでもないです。」

「よろしい。」

リランは事が起こる前にすぐに謝った。

その言葉を聞くと、蟬時雨からは先程までの周りが凍りつくような雰囲気は消え、いつもの優しい蟬時雨に戻っていた。

「アリシアもマリス相手に中々奮闘していましたね。《魔眼》の力は、それほどまでに強力ということですか。」

「…… 私たちが今まで《魔眼》の力を行使していた時は本来の3割程度、さっきの試合で引き出せたのは6割程と、【氷桜の魔眼】は言っていました。」

「6割の時点でマリスに本気を出させるとは…… その“繋”を完全に扱えるようになった時、勝つのはマリスではなくアリシアかもしれないですね。」

「一体いつになるのやら…… ヒメ様が言うには、母様達も“繋”の修練に励んだそうですけど、完全習得に数年かかったそうです。」

「でもコトシロが言ってたでしよう? 『お前たちには先代の2人よりも秘めたる才能がある。』 繫ツルの完全習得にはそう時間もかからないだろう』 って。」

アリスのコトシロの声真似を聞いてか、アリシアが思わず吹き出し笑い出す。

「え、そこそんな笑うところ?」

「ふふ… ごめんごめん。 思った以上に似てたものだからつい…。」

「あつ、皆さん、もうそろそろ時間になりますよ。」

注文した品を黙々と食べていたアリスは満足気に完食すると、ちらりと時間を確認して皆に伝える。

「うっそ… 私まだ食べ終わってない…。」

「まったくダメだなあアリシア。 お喋りに夢中になるからそうやって時間ギリギリになつてー」

「お待たせしましたー! 追加でご注文のあったデザートです!」

誰が頼んだのか、皆それぞれが顔を見合わせる。

「あ… 追加で頼んだの忘れてた…。」

アリスが小さく声を漏らす。

「では、お転婆な巫女2人は置いて、私たちは先に席を取っておきますか。」

蝉時雨はいじわるな顔をしながら他の3人に声をかける。

「ちよつと待つて!!すぐ食べ終わるから… んぐつ!!」  
「もー… 急いで食べると危ないでしょアリス… ほら、始まるまでまだ少し余裕はあるんだから、無理しないの。」

忙しなく食べて喉を詰まらせるアリスに対し、姉のようにアリシアは語りかける。

アリシアは蟬時雨にアイコンタクトすると、蟬時雨も理解したようであくく頷き、他の3人を連れて一足先に会場へ向かっていった。

## 第8話「黒き死神 v s 双星の一」

『ーさて!!続々と会場に戻って来ているようで何よりだ!!まもなく最終ブロック準決勝が始まるわけだが、予選の激戦を鑑みて、フィールドを囲む防護バリアを大幅にアップグレードしたぞ!!これにより、今後の試合も安全に観戦することができるよう!!』

観客達が続々と戻り、一通り席に着いたのを確認した司会は、再び声をあげる。

『次の選手達の準備は既に万端!!観客達もそろそろ集まりきってきただろうか!!』

観客達は、大きな歓声で司会に応える。

『いい返事だ!!それではさっそく再開していこう!第2回A・B・Tナウシズブロック準決勝第1試合!!選手入場おお!!』

直後、会場が暗転すると同時に、両側の選手ゲートにスポットライトが照らされる。

『：：第1試合ではアリスを圧倒し勝利!!この流れで、ナウシズ代表の座を再びその手に掴むのか!!ナウシズ守護輝士が1人、あるふい!!!そして対するは、第2試合でリランを手玉に取り快勝!!第1回A・B・Tのリベンジなるか!!双星の一、クオン!!』

両者がフィールドに現れ、互いを見据える。

2人とも既に武器を構え、準備を済ませていた。

「… 最初から全力というわけか。」

「うん。あるちゃん相手に長期戦は分が悪いからね。」

普段鐔の辺りに着いているリボンは既に解かれていた。

クオンは武器を構えた時から既に、「ブルクラケウス」を解放していたのだ。

「良い判断だ。前回の私との戦いで学んだようだな。なら、最初から私も本気でいこう。」

言葉を言い終えると同時に、あるふいの瞳と「グリムリーパー」の刃が紅く染まる。

『両者とも開始前から本気モードだ!!それではさっそく始めよう!!ナウシズブロック準決勝第1試合!!あるふい対クオン!!バトル… スタアアトオオオ!!!』

試合開始のブザーと同時に、あるふいはクオンの前からフツと姿を消す。

「っ!!」

背後から恐ろしい殺気を感じ、咄嗟にバリアを展開する。

だが一切攻撃は来る事がなく、あるふいは依然、開始時と同じ位置に立っていた。

「… その技、相変わらず厄介だね。」

「それはお互い様だろう? 全方位からの攻撃を全て吸収し溜め込むフォトンのバリア。硬さ、持続、吸収性、解放時の威力… どれをとっても「アルトリウス」を持ったお前に勝るエトワールなど居ないだろう。どれだけ殺気を放ったところで、全方位を守られ

ては打つ手がない。さて、どうしたものか……」

あるふいは考える素振りをする。

「そんな悠長に考える時間なんか与えないよ！」

クオンはふわつと浮き上がり、「アルトリウス」を掲げる。

「グリッターストライプ・イクシード」……フォイア!!」

無数のフォトン帯が放たれ、あるふいへと向かっていく。

素早く避けたあるふいだったが、クオンの放ったフォトン帯は僅かに数を減らしただけで、なおもあるふいへ向かって飛んでいく。

「追尾付きか……!!」

迫るフォトン帯を避け続けるあるふいに対し、クオンは更に追い打ちをかける。

「ブラックホールラプチャー・イクシード」……フォイア!!」

「っ!!」

あるふいの回避先を読み、吸引力のフォトンドームを設置する。

一般的なブラックホールラプチャーよりも更に強力となった吸引力は、あるふいの動きを止めるには十分なものだった。

「ルミナスフレア・アドバンスドフォーカス」……フォイア!!」

無数に展開された方陣から放たれたフォトンのビームは、一際大きな方陣に集中し、

その方陣を介することで、より強力なビームとなってあるふいへと放たれるかと思われるたその時――

パチンツと指を鳴らす音と同時に、クオンが生成した全ての方陣が、どこからともなく現れたレーザーで撃ち抜かれ形を失う。

「つ?! いったいどこから…!」

「私を追い込むのに頭を回しすぎたか? 私がただお前の攻撃を避けてるだけだと思われないことだ。」

クオンはハツとして上を見る。

上空には無数のビットが浮いていた。

「しかし…」アルトリウス”があつてこそか、バリアを張りながら攻撃も行えるとは、中々に厄介なものだな。隙があればいつでもビットを使ったのだが…!」

『クオンの猛攻を避けながらもしつかりと反撃の態勢を整えていたあるふい!! さすがは守護輝士! これは一筋縄では行かないぞお!!』

「でもあるふいさん、試合が始まってからまだ1度もクオンさんに直接攻撃を仕掛けていませんね。」

観客席から観ていたセラフィムは疑問に感じた。

それに対し蝉時雨が答える。

「エトワールのバリアは一定量の攻撃を吸収、蓄積し放つ強力なもの。そして”アルトリウス”の許容量は一般的なエトワールのそれとは比べ物にならないほどです。いくらあるふいといえど、下手に攻撃をすれば吸収されてクオンの攻撃手段を増やすだけでしようね。」

「でも、それだとあるちゃん一生攻撃できなくなる？」

アリスが更に疑問をぶつける。

「クオンのバリアも無尽蔵という訳ではありません。なんなら、どの技を放つよりも、バリアを維持し続ける方がしんどいでしょうね。一瞬でもバリアを解けば、周囲に散りばめられたビットとあるふいの殺気による騙し討ちが待っている。消耗戦を仕掛けられているのは、あるふいではなくクオンの方なのですよ。」

「でも問題なのは時間……ですよね？」

アリシアの問いかけに蝉時雨はこくりと頷く。

「その通りです。この状態が続くのであれば、制限時間内にクオンのバリアが解かれることは無いでしょう。時間切れとなれば、常に攻めに回っていたクオンの判定勝ちとなります。あるふいはあるふいで、どこかのタイミングで必ず仕掛ける必要があります。」

「——って感じでお互い考えてるんじゃないかな？」

「さすがだなクオン。戦闘における読みの鋭さは素晴らしいものだ。…普段のお前もそのぐらいしっかりしていると助かるんだがな。…」

あるふいは小声で、不満の声を漏らす。

「… 最後よく聞こえなかったけど… なんか言った？」

「いいや何も？ 幻聴か何かだろう。」

試合中のクオンは普段とは比べ物にならないほど集中力が高い。

おそらく聞き直さずとも、あるふいの小言も聞こえていたのだろう。

クオンは少しむすっとした顔をする。

そんなことも気にせず、あるふいは話を戻す。

「さて、お前の言う通りこの試合、私がいつ仕掛け、クオンがどれだけ耐えられるかが勝負の分かれ目だ。すぐ根を上げてくれるなよ？」

「… 根性対決なら負ける気はしないよ。あるちゃんなら、理由は言わなくても分かるでしょ？」

「ふん、ただの強がりにならないといいな。」

「その言葉、そつくりそのまま返すよっ!!」

再び、クオンが攻撃を仕掛け、あるふいがそれを避け始めた。

\*\*\*\*\*

―試合開始から十数分。

1試合の制限時間は原則として20分、その時点でお互いの有利不利に明らかかな差が無ければ、さらに時間が10分追加され、1試合の最大時間は計30分となる。

『さあ試合時間はまもなく残り僅か!!この流れは…延長戦に突入かあ!?!』

「ちよこまかと逃げ回ってばかり…あるちゃんらしくないね!!」

「まあそう言ってくれるな。それなりに反撃はしているんだから。」

あるふいの言う通り、序盤は回避の一手だったが、中盤からは徐々に反撃を仕掛け、今となつては攻防の差などほぼないようなものだった。

試合時間残り5分。

この会場にいる誰もがこの試合は延長戦にもつれ込むと確信していた。

―ただ1人を除いて。

「…さて、そろそろ時間だな。」

「…時間?どういう意味?」

「そのままの意味だよ。」

「：・ 通常の試合時間は20分。そして残りは5分。でもこの状況が続けば間違いないく延長戦に入るね。それを含めると残り15分。まだまだ時間はあるように思えるけど？」

疑問を感じるクオンに対し、あるふいは含み笑いをしながら答える。

「この状況が続けば」な。」

あるふいはロッドからライフルへと切り替える。

「さてと、準備は整った。まずはこれでいこう。」

パチンツと指を鳴らすと、空中には序盤に見せた時と比べ、数え切れないほどのビットが出現していた。

「何この量：・！！」

『これは：・ 空を覆うほどの大量のファントムビットだ!!! 一体いつから準備していたのかあああ!!!』

「気づかれないようだいぶ神経を使ったよ。その分、お前へと向けた攻撃のほとんどが命中することは無かったが：・ まあそれも結果的には正解だっただろう。」

あるふいは腕を振り上げる。

「時間にしておよそ2分。さあ、自慢の根性で耐えてみるー！」

あるふいが腕を振り下ろすと同時に、無数のビットがクオンに向けて一斉に射撃を始める。

「くっ!!」

クオンはバリアの強度を上げ、維持に集中する。

まるでゲリラ豪雨のように勢いよく降り注ぐフォトンの弾丸に身動きが取れず、ただバリアで凌ぐことしかできなかった。

—クオンにとって、2分がこんなにも長く感じたことなど無かつただろう。

なんとかビットの一斉掃射を耐え忍んだクオンは、軽く息を荒らげながらも、顔を上げあるふいを見据える。

「……はあ……はあ……」

「あれを耐えるとは、さすがの根性だな。」

「……言ったでしょ……根性なら……負けないうて……」

「そうか。なら、次はどうだ？」

あるふいはロッドへ切り替え軽く一振する。

「っ!？」

クオンの目に映ったもの、それは突如としてあるふいの頭上に現れた、無数の氷槍だった。

だがそれはただの氷槍ではなく、光属性のテクニクでコーティングしたものに、炎を纏わせたものだった。

「私の友人の技を参考にしたものだ。炎を纏わせる点はアリスとの戦いでおおよそ理解した。フォトンの消費はかなり激しいが、これだけあれば数も威力も申し分ないだろう。」

あるふいはロッドを振り上げ、にやりと笑う。

「そら……いくぞ!!」

あるふいがロッドを振り下ろすと同時に、3属性を使った無数の槍がクオンへと放たれる。

「くっ…!! お願いアルトリウス… もう少しだけ頑張つて!!」

クオンは息を上げながらも、なんとか力を込め、再びバリアの強度を上げる。

「っ!?!」

一発目の槍を受けたクオンがわずかに後ろへと押し出される。

(なにこの威力…!! このまま受け続けたら… 確実に場外に…!!)

槍をバリアで受けるごとに、クオンが徐々にフィールドの端へと押し込まれていく。

「……………!!」

『残り時間わずかのタイミングであるふいの壮絶な反撃!! そして少しづつフィールド端へと追い込まれていくクオンはこれを耐えきり延長戦に持ち込めるのかあ!?!』

(… 延長戦までとっておきたかったけど… もう使うしかない!!)

クオンは攻撃を耐えながらバリアの内側にフォトンを溜めていく。

「ブーステッド・オーバードライブ”… プロテクトリリース・アドバンス!!」

エトワールのスキルである”オーバードライブ”のエネルギーを、”アルトリウス”

によつて強化された”プロテクトリリース”に乗せることによつて、自身を中心にとて

つもない威力の大爆発を起こす。

それはあるふいの放つた3属性の槍を全て消し飛ばした。

なんとか、場外へと押し出される危機を脱したクオン。

だがあるふいは、この瞬間を待っていた。

「やつと殻を外したな。」

「っ!!」

ワールドのほぼ中心にいたあるふいは、一瞬でクオンの懐へと潜り込んだ。

クオンがバリアを再展開するまでの時間は僅か1秒。

そのたった1秒に、あるふいは勝負を仕掛けた。

あるふいがクオンの目の前から姿を消し、背後に現れる。

(これは幻：：本物はきつとまだ目の前に――)

身構えるクオンに対し、あるふいが更に仕掛けた。

「っ!!」

(何これ：：幻が：：複数：：!?)

クオンが視たものは、背後のみならず、左右、更には上からも迫ってくるあるふいの

姿だった。

「っ：：!!」

予想外の出来事にクオンの思考と身体が僅かに固まる。

既に1秒は経過していたが、思考が硬直したことによって延ばされたこの一瞬の隙

が、勝敗を決した。

武器と武器が変わる。

静寂が訪れた会場に、場外へとカランと音を立てながら落ちる”アルトリウス”の音が鳴り響く。

『…しよ…勝負ありいいいい!!!クオンがバリアを解いた一瞬の僅かな隙を突いたあ  
るふい、クオンの武器を場外へと弾き飛ばし、見事勝利だああああ!!!』

盛大な歓声が巻き起こる。

力無く座り込んだクオンに対し、あるふいは静かにしやがみ、声をかける。

「大丈夫か？クオン。フォトンの使いすぎで疲れたか？」

「…いよ…」

「ん？」

かすかに聞こえた小さな声に、あるふいは聞き直そうとする。

「ずるいよあるちゃん!!あんなに何度も殺気ぶつけないでいいじゃん!!ほんつつつと  
うに怖かったんだけど!!!」

クオンは俯いていた顔を上げ、あるふいへと訴える。

顔を上げたその目には、僅かながらに涙が浮かび上がってきていた。

「なっ…」

あるふいは慌てて、クオンの頭に優しく手を乗せる。

「す、すまなかった。お前が相手だから、どうしても加減が難しくてな……」

いつ涙が零れてもおかしくないような状態のクオンを、あるふいは必死にだめる。

「そ、そうだ、今度、カフェで新メニューが追加されるんだが、なんでも地球の料理をモチーフにしたみたいで、エビが多く使われたものらしい。お詫びとして、今度それを奢ってやろう。」

「……… ほんと?」

「あ、ああ……… だからその…… 泣くのは勘弁してくれ…… な?」

「……… うん……」

クオンは零れそうになる涙をぐつと堪え領く。

「……… あんなに慌てているあるふいさん、新鮮ですね。」

「……… ちっちゃい子の涙に弱いのかな……」

セラフイムとアリスは、そんな事を呟きながら、驚いた顔でワールドの様子を見ていた。

## 第9話「ウルvsナウシズ」

準決勝第1試合を終えたクオンとあるふいはフィールドを去り、その場には既に、マリスとユウが準備を整えて立っていた。

「控え室のモニターで見てたわ。蟬相手に快勝なんて、以前会った時に比べてとびつきり強くなったじゃない。」

「あれから随分と時間が経ってますからね。」

「最後に会ったのは、あたしがブレイバーの頃だっけ？あの頃は蟬相手に、手も足も出ない状態だったのにな。」

「あの時はまだまだまだひよっこで、お姉ちゃんに色々と教わっている最中でしたから。」  
「……での暮らしはどう？」

「楽しく過ごさせてもらっていますよ。ただここに来てだいぶ経ってきたので、そろそろウルの皆に会いに行かないといけないなって思っています。」

「そう……うん、決めるのはユウだもの。あなたにとって、居心地の良い方を決めるといいわ。」

「……マリスさん、ここはそんなしんみりとした話をする場所じゃないですよ。」

「ふふつ、それもそうね。久しぶりに会えたものだから、つい色々話したくなってしまったわ。」

「まりスは、聖剣エクシオン」を構えると、気合いを込めながら声を上げる。

「来なさいユウ。蟬に勝つたその実力、あたしにも見せてちょうだい!!」

「はい!!行きます!!まりスさん!!」

『それでは始めていこう!!:. . 準決勝第2試合!!ユウvsまりス!!バトルスタアアトオオオ!!』

ユウは開始の合図と共に凄まじいスピードでまりスへ接近し、「コートエッジver 3」を力強く振るう。

まりスもそれに応戦するように「エクシオン」を振り、互いの刃が激しくぶつかる。

お互いに放った渾身の一振りは大きな衝撃を発生させ、フィールドを包む保護バリアが振動を起こす。

「気合を込めた最初の一振とはいえあの威力:. . やはり守護輝士は、規格外ばかりですね。」

「そういう蟬さんもユウくんも激戦を繰り広げたじゃないですか。」

「ユウは私に合わせてくれていただけですよ。今後の展開を見ていけば、ユウの本当の実力がおのずと分かります。」

蟬時雨とアリシアの会話の最中、ユウとまりスは互いに刃を押し合い、鏢迫り合いの状態にあった。

「良い一撃じゃない…。踏み込みが甘かったら打ち負けていたかもね。」

「そんなこと言つて…。速度も合わせた僕の一振をその場に立ったまま迎え撃てるなんて、さすがはまりスさんです!!」

ユウは鏢迫り合いから離れながら、素早くツインマシンガンに切り替え、まりスに向けて放つ。

辺りが煙に包まれる中、まりスが煙の中から飛び出しユウに接近する。

ユウらまりスの一振をタリスによるワープで上空へ避けると、身体を切り返し、まりスに向けてソードを振り抜く。

だがまりスもタリスによるワープで避けると、ユウより上を取り、再びソードを振り抜く。

さすがに空中では身動きが取りにくかったか、ユウが地面へたたき落とされる。

なんとか受け身をとったユウは、空中にいるまりスに向けてツインマシンガンを連射する。

まりスもツインマシンガンを構え、ユウの放った弾丸を相殺していく。

地面へと着地したまりスはソードへと切り替えながら、尚も撃ち続けるユウの弾丸の

雨を駆け抜ける。

まりスが間合いまで迫ってくると、ユウもソードへと切り替え、互いにソードを振り合う。

激しい火花が散り、刃の交わる音が幾度となく繰り返される。

両者共に一切引くことなく、状況は均衡していた。

『お互い少しも押されることなく何度も刃を合わせる!!先に崩れるのはどちらだあ!?!』

観客たちが熱狂する中、蟬時雨達の元に、1人の少女が駆け寄ってくる。

「あつ!蟬さん!それに皆も!!」

「おや、ろんじやないですか。任務は終わったようですね。」

「うん、大会が気になって急いで終わらせてきたよ…。ユウくんは?」

「今試合中ですよ。相手はまりスです。」

「まりスさんが相手?!ユウくん大丈夫かな…。」

ろんは心配そうにフィールドで戦うユウを見守る。

「—っ!!」

ユウはふと、観客席にいるろんが視界に入った。

すると突然、ユウの手に力が入る。

「っ!？」

急に力を増したユウの剣圧に押され、まりスは1歩後ろに下がった。

『おおつと先に崩れ始めたのはまりスの方か?! 1歩後ろへと下がってしまったあ!!』

「何よ… 急に力が増したじゃない。」

「… これ以上彼女に心配をかけたくないので。」

「… なるほどね?」

まりスはユウの発言から何かを察し、これ以上押されないよう力を入れる。

「男らしさが上がったわね、ユウ。」

一言だけ言うと、まりスは交わる剣にさらに力を入れ、ユウを後方へ弾き飛ばす。

「ただどあたしにはあたしで、この先で会う約束をしている人がいるの。だから勝ちた  
いのなら… ありったけをぶつけてきなさい!!」

” 聖剣エクシオン ” を両手で構える。

同時に、まりスの背中からフォトンによって構成された白い翼が生える。

「… 分かりました。まりスさんの本気と僕の本気、どちらが上か勝負です!!」

ユウは “ コートエッジ ver3 ” を上へ掲げ、そして素早く振り下ろす。

それと同時に、髪の毛が逆立ち、瞳の色が橙色に染まる。

『お互いここから本気モードだ!!勝敗の行方はいつたいたいどうなる!!』  
先に動いたのはまりスだった。

素早く前へ飛び込むと、一瞬にしてユウの懐へと入り、“エクシオン”を振りかざす。  
ユウはそれに対し冷静に、しっかりと迎え撃つ。

両者の刃が再び交わるが、先程までよりもさらに衝撃が増し、フィールドを包む保護  
バリアが大きく振動する。

まりスは競り合う事無く、タリスによるワープで背後へ回り込むと、再びソードを振  
るう。

ユウは前方へ飛びながら身体を翻し、宙を舞いながらツインマシンガンでまりスを攻  
撃する。

まりスはソードを盾に弾丸から身を守る。

弾丸を撃ち続けながらも、ユウはタリスでまりスの背後へと回り込み、切り替えた  
ソードを振るおうとする。

だがまりスはそれを見越して、上空へとワープする。

「っ!!」

自身の放ったツインマシンガンの残弾が、ユウへと向かう。

ユウは咄嗟にソードを構え直し、弾丸を防ぐ。

弾丸を防ぎ切ったユウは前を見るが、まりスは追い討ちをかけることなく、距離を置いて静かに立っていた。

「なかなかやるじゃない。」

「まりスさんに並ぶため、あの頃からだいぶ鍛えてきましたから。」

「なら、あたしもその努力に応えてあげないとね。」

まりスが再び前へ飛び出す。

対するユウは先程とは違い、まりスと同じように前へ飛び出す。

勢に乗った2人の刃が激しく交わる。

「…そろそろまりスが決めにいきそうですね。」

蝉時雨がふと呟く。

「え？まりスさん既に本気で戦ってない？」

アリスが不思議そうな顔で蝉時雨を見る。

「あれはただ“エクシオン”を媒介としてフォトンの出力を上げただけ。まりスの本当の力は、それだけではありません。それについては、いリスも知っていますでしょう？」

「…うん。」

いリスは小さく返事をする。

「まあ、見ていれば分かりますよ。」

いつたいたなんの事やら理解できないアリス達は、蟬時雨に対し疑念を抱きつつも、フィールドのユウとマリスへと視線を移す。

「……もっと戦っていたい所だけど、次もあるし、ここらへんで決めさせてもらおうかしら。」

「おかしなことを言いますね。お互いが本気になってからそれなりに時間が経っています。未だに勝敗が決まるほどの決定的な差は無いように感じますよ。」

「そんなの簡単な話よ。あたしがまだ本気じゃなかったってこと!!」

不意に、ソード同士で競り合っているにも関わらず、マリスの懐からツインマシンガンが飛び出す。

「っ!?!」

ユウは急ぎその場を離れる。

マリスは左手に構えたツインマシンガンの一丁をユウに向けて撃つ。

「くっ!!」

ユウは咄嗟にソードで弾丸を防ぐ。

「まだまだ!!」

ユウはマリスの声が見えた上空を見る。

そこには、四方八方に浮かぶ無数の弾丸が、今まさにユウに向けて放たれようとして

いた。

ユウはその場を離れようとタリスでワープする。

「逃がさないっ!!」

だが、先を読まれたまリスに背後へワープされ、ソードで叩き落とされる。

「ぐっ……」

もはや避ける時間などない。

ユウはソードを構え、あらゆる角度から飛んでくる弾丸を防ぎ続ける。

それでも、全てを防ぐことはできず、何発か直撃してしまう。

「くう……っ!!」

ユウがついに膝をつく。

この隙を見逃さず、まリスはユウへと迫り、ソードを振るう。

（「ユウくん……!!」）

「……!!」

「んなっ!!」

突如、ユウを中心に衝撃波が発生し、まリスが吹き飛ばされる。

地面へと着地したまリスは、ユウの様子を見て驚く。

「へえ……ユウもまだ力を隠してたってわけね。」

稲妻のようなものが、ユウの周囲をバチバチと走る。

見た目の変化こそそれだけだったが、対峙しているまりスからすれば、明らかに威圧感が高まっているのを感じた。

「……………」

ユウは一切口を開かず、ただ静かに“コートエッジ”を構えると、蝉時雨との試合で見せた時と同じく、刀身が眩い光に包まれる。

「…まさかこの試合を通してその域に達するなんて驚いたわ。でも…勝つのはあたしよ!!」

まりスは“エクシオン”を振りかざす。

背中の中の羽が一際大きく広がり輝きが増す。

“エクシオン”に光の粒子が集まり、巨大な光の剣と化する。

「あれは蝉さんと同じ…」

セラフイムの眩きに対し蝉時雨が口を開く。

「確かに技の原理は私と同じですが、威力も範囲も、私とは比べ物にならないほどです。」

「さあ…フォトンの力比べよ!!!ユウ!!!」

「……………!!」

ユウは渾身の力を込めて、思い切り“コートエッジ”を振り抜いた。

同時にまりスも、「エクシオン」を思い切り振り下ろす。

「(エクスカリバー!!!)」

両者の全身全霊を込めた一振が衝突する。

フィールド内は光に包まれ、衝撃が強すぎるあまり、保護バリアに亀裂が入る。

亀裂から光が漏れだし、観客のほとんどが思わず目を閉じる。

しばらくして光が収まり、その場にいた全員が目を開け、フィールドに注目する。

そこには、倒れ込むユウと、息を荒らげながらも毅然と立つまりスの姿があった。

『……勝負あり!!!ユウの戦闘不能につき、勝者は……まりスだああああ!!!』

歓声が響き渡る。

まりスはユウの元に近づくと、優しく声をかける。

「ユウ……大丈夫?」

声をかけられたユウはゆっくりと目を開ける。

「まりスさん……僕は……負けたんですか?」

「ええ、フォトン切れだね。それにしてもユウ、あんた、まだまだ強くなれるわよ。」

「……?それってどういう……」

「そのうち分かるわ。でも大きな脅威が去った今、それがまた現れることになるかどうかは分からないけどね。」

まりスは含ませたような物言いをしながら、そつと手を差し出す。

「ほら、立てる？」

ユウはまりスの手を借りながら、ゆっくりと立ち上がる。

『準決勝に相応しい試合を魅せてくれた彼らに盛大な拍手を!!!そして今から、フイールドのメンテナンスに伴い、30分ほど休憩となる!!メンテナンスが完了次第、ついにナウシズの代表が決まるぞおおお!!!』

## 第10話「死神vs戦姫」

『…さて!!フィールドの準備も整い、観客もほぼ全員が戻ってきたな!!!!それでは本日の最後の試合!!ナウシズ代表の座を争う2人を紹介していこう!!』

会場が暗くなり、フィールド両端の選手入場口にスポットライトが照らされる。

『まずはこの選手!!死神と恐れられた腕は確かなもの!!これまでの相手に大きな苦戦もなく、圧倒的な先読みと技術によって順調に決勝まで勝ち上がってきた!!第1回に続き、今回もナウシズ代表の座を手に入れるのか!!ナウシズ守護輝士が1人!!黒き死神”…あるふい!!』

『対するは!!準決勝で第1回ウル代表のユウに見事勝利し、決勝へとコマを進めたナウシズのもう1人の守護輝士!!ナウシズ代表の座を手に入れ、まだ見ぬ強者達と相見えることができるのか!!白き戦姫”まりス!!!』

司会の紹介と共に、2人がフィールドへ入場し、静かに向かい合う。

『この場に参加した名だたるアークス達を打ち倒し、今ここに向かい合う2人の守護輝士!!ナウシズのアークスならば1度は考えたことがあるだろう!!どちらの守護輝士がより強いのか!!それが今!!この場で決まろうとしている!!』

大歓声が会場を包み込む。

決勝戦ということもあって、未だかつてない量の声援が飛び交い、場の雰囲気が大いに盛り上がる。

「さて、調子はどう？」

「まあ、悪くはないな。修復作業で休息の時間が増えたのが幸いだった」

「なら良かったわ。クオンとの試合でだいぶ無理をしているように見えたから、少し心配していたのだけれど」

「それを言うならお前もだぞまりス。ユウとの戦いで、相当力を出していたじゃないか」  
「予想ではもう少し楽できると思ったのだけれどね。終盤になって、ユウから今まで感じた事の無い威圧感を感じたの。あれはきっと、ユウ自身もまだ自覚してないさらに上の力だったわ」

「ほう、それはつまり、まだユウは強くなると、それは楽しみだ。だが今は、お互いに目の前の相手との試合に全力で挑まないとな」

両者とも楽しそうな笑みを見せながら、武器を構える。

あるふいのカタナの刀身と瞳が深紅に染まり、まりスの背には、白く輝く翼が現れる。  
『両者ともに用意はできたようだ!!! それでは本日最後の戦い…… A・B・T ナウシズブ  
ロック決勝戦!! あるふい対まりス!! バトル……… スタートオオオオ!!!』

試合開始の合図とともに、大きな白い極光と一筋の紅い閃光が激しく衝突する。

互いの武器が交わり、その衝撃によってフィールドの各所に亀裂が入る。

激しい衝突の後、あるふいは瞬間移動を繰り返し、何度もまりスの死角から武器を振るうが、まりスはそれを全て防ぎカウンターを仕掛けていく。

カウンターを仕掛けられたあるふいは、それすらも把握済みとばかりに、何度も軽やかにそれを避けたのち、素早く距離を取る。

「……反応速度に疲労の色は見えないな。安心したよ」

「決勝を楽しみにしていたのだから当然でしょう。残念な思いはさせないわ」

「それは嬉しい限りだ。なら……次は少し攻め方を変えよう」

そう言うと、あるふいは武器をカタナからロッドへ切り替え、まりスに向けて様々なテクニクを放つ。

「避けるなり相殺するなり、好きにするといい」

「なら……突っ込ませてもらうわ!!」

力強く踏み込んだまりスは、勢いよくあるふいへと突撃していく。

炎、氷、雷、風、闇、光……様々なテクニクの降り注ぐ中、必要最低限の回避とソードでの相殺を行いながら、まりスは素早くあるふいとの距離を詰める。

「そっつー！」

まりスは間合いに入ると、素早くソードを振るうが、あるふいはそれをロツドの柄で受け止める。

続けてまりスは受け止められたソードに力を込めあるふいをのけぞらせると、素早く回し蹴りを行う。

「っ…!!」

不意を突かれたあるふいは後方へ蹴り飛ばされる。

まりスは追撃をかけようと、一直線にあるふいの目前へと向かっていく。

少し前へ駆けだしてすぐ、何かセンサーに引つかかったようなごくわずかな小さな音をまりスは聞き取った。

「っ!?!」

足元に敷かれたいくつもの地雷式ビット。

まりスがそれに気づくと同時に、すぐ近くのビットが起爆する。

周囲にあつた別のビットも連鎖するように爆発し、辺り一帯が煙に包まれる。

直後、漂う煙の中から飛び出すまりスの姿が試合を見ている全員の目に映った。

刹那の差で地雷ビットの爆発から逃れ上空へと飛んだまりスの背後に、黒い影が舞う。

あるふいはまりスに向かって、勢いよく鎌を振り下ろす。

「残念っ!!」

まりスは切り替えたソードで鎌をひっかけるとその場でくるっと回転し、その勢いであるふいを地面へ叩き落とした。

あるふいは寸前のところで受け身を取り、すぐに体勢を立て直す。

「……つつう…… さすがに全て思惑通りとはいかないか」

「あれだけのビットを既に仕掛けられてるなんて思わなかったわ。仕掛け始めたのは…… 試合が始まってすぐからかしら。蹴られたのもわざとで、地雷原に誘い込む為でしょう?」

「ご明察。空中の追い打ちはただの欲張りだがな。そのせいで結局巻き返されてしまったのが勿体ない」

『わずかに押されていたあるふいだったがビットの大量爆発により形勢逆転!!しかし直後の追い打ちをまりスに見切られてしまい、再び体力勝負はまりス側が有利あ!!』

「で…… 一つになったら本気を出してくれるの?そのままの状態で戦って勝てるほどあたしとあんたの差は開いていないっていうのは、よく分かっているでしょう?」

「…… そうだな。もう少し渋っておきたかったが、やむをえまい」

あるふいは、左目を覆う眼帯を外す。

閉じていたあるふいの左目が開き、フォトナー特有の瞳が現れる。

その瞳は小さな稲妻を走らせながら、しつかりとまりスを見据える。

「さて、本番といこうか」

「ふふっ……この威圧感……やっぱり全力のあんたとは戦い甲斐があるわ」

まりスはソードを構え直すと共に、背に生えるフォトン状の翼の光を更に強く輝かせる。

周りを漂うフォトンが、それに感応するかのように眩い光の粒子となり辺りを舞う。

「……………っ!!」

一時の間を置き、両者同時に前へ飛び出す。

互いに間合いまで近づいた瞬間、まりスがソードを素早く横に振り切るが、それはいとも容易く空を切る。

目の前から消えたあるふいはまりスの頭上へ現れ、カタナを振り下ろす。

まりスは振り切った勢いを殺さず、そのまま回転をしながら剣先の角度を上へ変える。

互いの武器が激しくぶつかりフィールドを囲む防壁に衝撃が伝わる。

同時に上からの衝撃によって、攻撃を防いだまりスの足元を中心に、フィールドに大きな亀裂が入る。

まりスは片手にツインマシンガンの一丁を出現させるとあるふいへ向けてすぐさま

撃ち込む。

あるふいは瞬時に姿を消し射撃を回避すると、次はまりスの懐へと現れ再びカタナを振るう。

だがまりスは既に右手に持っていたソードをタリスへと切り替え、その場から姿を消し、あるふいのカタナが空を切る。

先ほどとは逆の立ち位置になり、あるふいの頭上へとワープしたまりスは、再びソードへ戻し、あるふいに向けて思いっきり振り下ろす。

あるふいはカタナで攻撃の軌道をずらし、まりスのソードは地面に激しく打ち降ろされる。

その隙を突き、あるふいは力強くまりスに蹴りを放つ。

「くっ……!!」

なんとか防御をしたものの、フォトンを込めたあるふいの蹴りの威力は完全に抑えきれず、激しく遠くへ吹き飛ばされる。

一般的なアークスの純粋な体術とは違い、あるふいは自身のフォトンをその身に纏わせて体術のダメージを底上げすることができる。

武器を介さずフォトンによる攻撃を行うことができるのは現存するアークスの中でもあるふいただ一人。

たとえまりスだとしても、生身でまともに受ければそれで決着がついていただろう。「ほう、よく守ったな。」

まりスはなんとか受け身を取り、急ぎ顔をあげると、既にあるふいの頭上には複数の属性から構成されたテクニクによる無数の槍がまりスへ向けられていた。

（あれはクオンとの戦いの時に見せた…!!）

あるふいが掲げたロッドを振り下ろすと同時に、無数の槍がまりスに向かって飛んでいく。

まりスはすぐに体勢を整え、急ぎ回避行動を起こす。

向かってくる槍を避けながら、僅かな隙を狙って、まりスはあるふいの周囲にタリスを複数投げ飛ばす。

「っ!!」

「さっきの蹴りは効いたわ。お返しにこれでも喰らいなさい!!」

あるふいを包囲するように設置されたいくつものタリスを巧みに使い、まりスは様々な角度からツインマシンガンによる射撃を行う。

「逃げ場はないか…いいだろう…!!」

あるふいは持っていたロッドを素早くカタナへ切り替え、飛んでくる弾丸を全て弾き落とす。

『なんと!!まりスの放つ無数の弾丸を全て弾く!弾く!弾き落とす!!これはまさに神業だあああ!!』

しばらくまりスによる弾丸の雨が続き、それを弾くあるふいによって、辺りには煙が立ちこみ始める。

煙によって完全にあるふいの姿が見えなくなると、まりスは射撃を止め、ソードに持ち替えてあるふいの反撃に備える。

(まだ煙の中にいるわね.: 動く気配が未だに無い.: どういうこと?)

不穩に思うまりスに対し、突如煙の中から一本のカタナがまりスに向かって飛んでくる。

「なっ!?!」

予想外の攻撃に手が緩み、持っていたソードが弾き飛ばされてしまう。

ソードは宙を舞いながらまりスの後方へ飛び、地面に突き刺さる。

「ちっ!!」

「この大会のルールにおいて武器を手放すことは大きなリスクを伴う。だからそれに準ずる行動をするはずがない。そう思うのも無理はないだろうな。」

あるふいの声が、弾き飛ばされたソードの方面から聞こえた。

振り向いたまりスの視線の先には、地面に刺さるソードの前に立つあるふいの姿が

あった。

「あとはこれを場外に放り投げればまあ終わるわけだが……」

「くっ……」

悔しがるまりスに対し、あるふいはにやりと笑いながらカタナを納める。

「まだ終わらせるわけないだろう?」

あるふいは肉弾戦の構えをとると、まりスに対し、クイクイと手招きをして挑発する。

「取り戻してみなつてことね……上等っ!!」

まりスは力強く踏み込み、あるふいに向かって突っ込んでいく。

『武器を駆使した射撃やテクニクの激しい攻防の次は、徒手空拳による肉弾戦の始ま

りだあ!!!』